

ホーリネス・リバイバルとは何だったのか

著者	池上 良正
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	62
ページ	33-69
発行年	2006-10-10
URL	http://doi.org/10.15021/00001571

ホーリネス・リバイバルとは何だったのか

池上 良正
駒澤大学文学部

はじめに

1 大正のリバイバル

- 1.1 期待のリバイバル
- 1.2 世俗への忌避
- 1.3 再臨運動の余波
- 1.4 リバイバルへの構え
- 1.5 リバイバルの始まり
- 1.6 奨励と自制
- 1.7 全国リバイバル大祈禱会
- 1.8 リバイバル的集会の常態化
- 1.9 再臨へ

2 昭和のリバイバル

- 2.1 窮地のリバイバル

2.2 脱俗路線の矛盾

- 2.3 リバイバル集会の常態化と変質
- 2.4 矛盾・葛藤の諸相
- 2.5 リバイバルの始まり
- 2.6 安東の神社問題
- 2.7 批判・反発・無視
- 2.8 秋の全国リバイバル大会
- 2.9 期待から苛立ちへ
- 2.10 伸び悩む教勢
- 2.11 国策追随とイスラエル主義
- 2.12 再臨観の混乱

結 び

はじめに

ホーリネス教会では、大正中期と昭和初期という二つの時期に、それぞれ大規模なりバイバルが起こったといわれている。

この教会（当時の正式名称は「東洋宣教会ホーリネス教会」）は、中田重治（1870-1939）というカリスマ的な指導者のもとに、戦前期の日本キリスト教界に一定の勢力を占めたことで知られている。昭和初期には、日本基督教会、日本メソヂスト教会、日本組合基督教会、日本聖公会につづき、プロテスタントでは第5位の信徒数を誇る教派にまで成長した。キリスト教が旧士族・学生・知識人などの教養宗教・道徳宗教に限定されがちだった近代日本にあって、中下層の勤労者層にも一定の信徒を獲得したことで知られている。その一方で、彼らの熱心な布教とラディカルな行動様式は、強い指導性を発揮したリーダー中田の個性にも後押しされ、しばしば他教会との軋轢を生むことになる。同じく民衆層への布教を重視した賀川豊彦や救世軍の山室軍平などが、その強い社会的影響力のために、多くの研究がなされてきたことに比較すると、カウマン夫妻と中田によって創始された初期ホーリネスの流れ（中央福音伝道館、東洋宣教会など）は、非キリスト者のみならず、キリスト教の主流派からも忌避・嫌悪され、研究者からも敬遠される傾向が強かった。

19世紀後半にアメリカで高揚したホーリネス運動には、「新生」「聖化」「神癒」「再臨」という「四重の福音」を掲げる一派があり、これが日本のホーリネス教会に移植された。神学的にはメソジストと同じくアルミニウス主義に立ち、とくに聖化（初期のころは主として「聖潔」の訳語が用いられ「きよめ」とよばれた）の教義はキリスト者の原罪なき聖性をめざす「完全主義」の立場をとるため、カルヴァン主義の主流派とは激しく対立した。さらに、近代医療までも否定するような神癒（これも初期のころは、もっぱら「いやし」というルビが付された）や、差し迫ったイエスの再臨を待望する教義によって、主流教派からはセクト的な急進派、ないしは異端的存在と見なされがちであった。

しかし、このホーリネス教会の周縁的な性格と活動の特徴は、近年注目を集めているキリスト教の「聖霊運動」を念頭におくとき、日本におけるその系譜の先駆的な存在として、あらためて重要な意義をもつことになる¹⁾。知られるように、20世紀最後の四半世紀には、聖霊の働きやその体験を重視するキリスト教の大規模な台頭現象が、世界各地で注目された。具体的特徴としては、異言・預言・悪霊祓い・神癒などの重視、さらには手を高く挙げて聖霊に満たされたと称する恍惚状態での礼拝や、リズムカルな歌や踊りによる熱狂的な賛美などがあげられる。こうしたグループは、ペンテコステ派、カリスマ刷新運動、聖霊の第三の波など、さまざまな呼称による展開をみせている。しかし、これらを各教派の「信仰」をはなれた比較宗教学的な文脈のなかで考察しようとするれば、シャーマニズムと総称されてきたような各地の在来文化に根ざした独立教会なども含めて、「聖霊運動」というさらに広い用語で包括する視点が有効になる。この運動に関与するキリスト教徒は、世界各地で増加し、とりわけ1980年代以降、開発途上国の都市部などを中心とした急成長が注目されている。

プロテスタント的信仰による脱呪術化と個人の内面の合理化を近代の牽引力とみるウェーバー的解釈に照らせば、聖霊や悪霊の体験を重視するような「聖霊運動」などは、時代に逆行する少数派の抵抗、あるいは各地のローカルな文化がもつ「呪術の園」への退行現象にも映るだろう。しかし、ラテンアメリカ、アジア、アフリカの都市部に台頭した聖霊派教会の現状をみれば、むしろファンダメンタルな保守的教義と融合することによって、新興の都市生活者がかかえる苦悩の解消や、世俗内禁欲的な生活態度の形成に、きわめて適合的な機能を果たしている点なども注目されている²⁾。その意味では、こうした「聖霊運動」の台頭もまた、拡大をつづける経済的グローバリゼーションの潮流に棹差し、近代の推進役としての積極的な役割を手放していない、といえよう。それらは文明化の主役を自負してきたキリスト教世界の尖兵として、しぶとい世界戦略の新たな一翼を担いつづけている、という見方さえ可能かもしれない。

以下、本論では大正8年（1919）と昭和5年（1930）の2度にわたってこの教会に起きたとされている「リバイバル」と称される出来事を取り上げる。リバイバルとは、一般には「信仰復興」と訳され、「礼拝・祈禱会などでカリスマ的指導者の説教や祈禱

に触発され、信仰的感情が熱気を帯び、聖霊の臨在が唱えられ、信仰の冷却をおぼえていたものがその復興を体験すること」とされ、「日本ではむしろ反キリスト教的な風潮が教会を席卷したと思われた時、キリスト者が信仰復興を体験し、更に未信者が入信の決意を表明するようなことも生じた」という³⁾。この種の現象はキリスト教史のなかに無数に起こったと思われるが、これを「リバイバル」の語で特定するようになったのは近代の英語文化圏であり、とくに1730～40年代のアメリカで、ジョナサン・エドワーズやジョージ・ホイットフィールドによって主導された出来事が、模範的なリバイバル現象の原型として位置づけられていった。ここでは「町の風紀一般が改まり人々が熱心に信仰を求めようになることと、特に教会で説教を聞いた人々が極度の感情的・身体的興奮のうちに回心をもたらす神の恵みを祈り求めるようになることの2局面」があったという⁴⁾。

こうしたリバイバル現象にたいしては、信仰者か非信仰者かという相違によって、あるいは信仰者の内部でも聖霊の意義や働きをめぐる解釈の違いによって、しばしば叙述や理解に極端な価値判断が伴う。とくに信徒たちが泣き叫びながら互いの悔い改めを激しく迫ったり、陶酔的な恍惚状態のなかで「霊に憑かれた」と表現したくなるような状況に関しては、それを激情にかられた狂信とみるか、真の聖霊に満たされた純正な信仰の証拠とみるかという、二項対立の論争が生まれやすい。

本稿で扱うホーリネス教会のリバイバルについても、内部者と外部者との評価の差は大きい。内部者の視点からは、たとえば大正のリバイバルを「信仰のリバイバル」、昭和のリバイバルを「望みのリバイバル」と称して、ホーリネス教会史における積極的な位置づけを与えようとする立場がある⁵⁾。その一方で、とくに昭和のリバイバルに関しては、あまりにも当時の社会状況から遊離した閉鎖的・独善的な熱狂が、その後の教会分裂を引き起こしたばかりか、国家による弾圧に都合な口実を与える一因になった、といったような消極的な評価も聞かれる。とりわけ戦後に中田重治の直系とは一線を画して再スタートした現在の日本ホーリネス教団においては、こうした深刻な反省に立って、聖霊運動が称揚するような熱狂的な「リバイバル」からは、やや距離をおくという姿勢が強かった。このような警戒感・嫌悪感はキリスト教史を扱う研究者にも広くみられ、したがって、戦前期のホーリネス研究といえ、いわゆる国家による弾圧期に関心が集中し、その「犠牲者」「抵抗者」として描き出す研究が蓄積される一方で、大正後期から昭和初期の飛躍的な信徒の増加や、それをうながしたとされるリバイバル現象などに関しては、まとまった研究もほとんどなされてこなかったという、奇妙な偏りが生まれたのである。

本稿では、従来の研究が陥りがちだったリバイバルの二項対立的評価、すなわち、それが教会分裂や独善を生む体験主義なのか、それとも聖霊の導きによる本来の福音主義なのか、さらには国策に追随したナショナリズムの暴走なのか、それとも聖書に忠実な

イスラエル回復運動なのか、といった論争からはひとまず距離をおき、二つの「リバイバル」と称されてきた出来事の発生と経緯を、教会をとりまく当時の錯綜した社会的・時代的背景のなかに位置づけながら、具体的にどのような人物がどのような行動をとり、どのような事態が生じていったのかといった点を、残された資料に即して、できるかぎり冷静に辿ってみたい。もとより本稿もまた「外部者」のひとりにすぎない筆者の立場からの解釈であり、その意味では、何か特権的な「真理」を主張するものではない。

1 大正のリバイバル

1.1 期待のリバイバル

ホーリネス教会史において「大正のリバイバル」と呼ばれてきた一連の出来事は、大正8年(1919)11月に始まり、約1年間つづいたとされている。先にもあげたように、当事者の視点からは、この出来事には「信仰のリバイバル」といった意義づけもある。しかし、ここでは筆者の視点から、その特徴を「期待のリバイバル」という言葉で押さえてみたい。つまり、「大正のリバイバル」とは、当時のホーリネス教会に属する人々が、切迫した再臨を強く待ち望みつつ、一貫した独自路線への自信を深める契機になったという点で、大きな「期待」を原動力に展開された運動であった。ここでの再臨信仰は、静かな諦念によって座して終末を待つといった来世志向の態度を育むよりも、むしろ積極的な布教と伝道によって教会を成長させる現世のエネルギー源として働いた。全国で会員数1,500名足らずの教会は、このリバイバルを契機に活性化され、10年後には1万人をこえる教派にまで成長することになる。

ところで、このリバイバルが起こった当時の社会状況に目を向けるならば、第一次大戦がもたらした好景気のなかで、都市部を中心に華やかな繁栄が謳歌される一方で、内外の政治経済をめぐる矛盾が、さまざまなかたちで噴出をはじめめる節目の時期でもあった。みずからはほとんど手を汚すことなく戦勝国に便乗しえた戦争によって、日本の国内産業は一時的な活況を呈する。各地に「戦争成金」が誕生し、「今日は帝劇、明日は三越」といわれるような都市の有閑富裕層も生まれた。もとよりこの繁栄は、大正7年に各地で頻発した米騒動に象徴されるように、急速なインフレや拡大する経済格差のうえに築かれたものであった。大正8年という年は、そうしたいわば「バブル景気」の最後の絶頂期だった。

その一方で、帝国主義政策の矛盾は、中国・朝鮮半島での反日抗争となって表面化する。のちに3・1運動(朝鮮)、5・4運動(中国)などと称されるようになる抗日・排日の運動は、いずれもこの年の前半に起こっている。国内では大正デモクラシーの波に乗って労働者の権利意識が高揚し、各地で労働争議が頻発する。大正9年に入ると2月には八幡製鉄所、4月には東京市電で大規模なストライキが行なわれ、5月1日

には上野公園で日本最初のメーデーが開かれた。さらにこの年には戦後恐慌が起これ、やがて不況は慢性化していく。大正12年の関東大震災による首都壊滅が、これに追い討ちをかけた。長期的展望としてとらえるならば、以後の日本は、第二次大戦の敗戦にいたるまで、抜け出ることのできない長い不況期に入る。

戦時下の好景気から長期不況に転じるこの時期は、人々の内心に先行きの見えない不安感を生み出した。新宗教の世界では、「世の立替え立直し」「大正維新」を唱えた大本教がめざましい成長をとげた。ホーリネス教会に第一のリバイバルが起きたのは、まさに日本がこうしたバブル絶頂期から泥沼の不況期へと引きずり込まれる転回点であり、内外のさまざまな矛盾が噴出する政治経済の長期低落化への道行きのなかで、教勢のめざましい発展をとげていったのである。

1.2 世俗への忌避

大正デモクラシーの波は、西欧文化とのつながりが密接なキリスト教界にも大きな影響を及ぼした。この時期、主流教派は積極的な連合を模索しつつ、社会にたいして政治的な主張をアピールするようになる。それはキリスト者の独自性を強調すると同時に、社会主義や共産主義の過激な革命思想に対抗して、国策にも順応しうる「健全な」社会改革を誇示するものであった。たとえば、大正8年2月11日付けで発表された日本基督教会同盟による「宣言」を見てみよう。

これは次のような文章から始まっている。「世界大戦勃発するや、宇宙を統御し給ふ神の宝座は、一時『雲と暗とに』遮蔽せられ、世人多く基督教の權威を疑ふに至れり。然れども戦局一転、強敵をして休戦を請ふに至らしむるや、戦雲の間より見出し来れる『義と公平とを以て基礎とする神の宝座』は中天高く万民の瞻仰する所となり、曩に一たび疑はれたりし基督教の權威、漸やく一般識者の認識する所となれり」。つまり、欧州戦争という苦難を乗り越えて、いよいよキリスト教が本領を発揮すべき時がきた、という時代認識が示される。さらに連合軍の勝利はデモクラシーの勝利であることが述べられ、この思想の浸透こそ世界の大勢であるから、われわれもこれに抗することはできないが、そこには危険も伴うとされる。だから「宜しく起つて我同胞国民をして、一方此新環境と同化して其利益を享有せしむると共に、他方此等新主張の極端の弊に陥るを戒め、国家民生をして順当なる発展を遂げしむるべきにあらずや」として、具体的に次の5項目の提言がなされている。「一、神の父たる事並に人類の同朋たること／一、良心の權威、信仰の自由を尊重すること／一、人道を重んじ国際道徳の樹立を努め世界永久の平和を図ること／一、国民的使命を認め之が遂行に尽力すること／一、女子の眞位置を認め、家庭の清潔を保ち、国民生活の品位を高むること」。

この「宣言」を発した日本基督教会同盟とは、プロテスタントの超教派的な連合組織として明治44年(1911)に発足したもので、中心はいわゆる3大教派、すなわち日本

基督教会（日基）、日本組合基督教会（組合）、日本メソヂスト教会（メソジスト）で、その他いくつかの小教派が加わっていた。大正8年当時は、圧倒的な統率力で組織を束ねていたメソジストの本多庸一亡きあと、小崎弘道（組合）が会長をつとめ、平岩愼保（メソジスト）、星野光多（日基）が副会長であった。常議員には井深梶之助、植村正久、松野菊太郎、海老名弾正らの重鎮も名を連ねていた。

上記の宣言文には、当時のプロテスタント主流派の政治的スタンスが良くあらわれているが、とりわけ翌9年5月に出された「宣言」は注目される。ここでは、折から朝鮮半島や大陸で起こった抗日運動への対応が焦点となっており、たとえば次のような文言が見られる。「朝鮮事件が基督教徒の迫害たるが如く誤解せられ、又我国人が朝鮮人に対して取りたる態度に関しても事実が針小棒大に報道せられたることありしは、吾人の頗る遺憾とする所なり。（中略）吾人は今後当局の為す所に留意し、我国人をして正義と人道に依りて鮮人を指導せしめんことを期す。（中略）欧米諸国民の中には、我国を以て軍国主義侵略主義を抱く第二の独逸なるかの如く誤解するものあり、是れ吾人の甚だ遺憾とする所なり」。

抗日運動の首謀者にキリスト教徒が多かったという事実にたいして、批判の矛先がキリスト教そのものへ及ぶことを食い止めようという意図がうかがえる。非難を回避しようとするあまり、海外侵略をも正当化するような国家追隨の姿勢もみられる。今日の視点から、その限界を言い立てて断罪するだけでは意味はないが、ここに当時の超教派運動がかかえていた根本的なディレンマを読みとることは必要であろう。つまり、教会同盟に代表されるような諸教派合同の試みは、社会的にも少数派で種々の干渉を受けやすいキリスト教徒たちが、一致結束することで自分たちの権益を守り、社会の干渉にたいする防護壁を築くという意義が見いだされる一方で、こうした合同の動きそのものが、ファシズム的統制の受け皿となり、やがて訪れる翼賛体制への地ならしの役割をも果たしていった、というディレンマである。

活発化する教会合同の動きと、相次ぐ「宣言」に代表される政治的発言にたいして、「監督」という立場でホーリネス教会を率いる中田重治は、協力を拒んだだけでなく、むしろ激しい口調で批判をつづけた。大正8年の年頭、ホーリネス機関紙の『聖潔之友』に発表した「新運動の予想」（大8.1.9）⁶⁾では、「今年は昨年に引続ひて教会合同の問題が起ると思ふ」としたうえで、「先づ信仰の一致と霊によりて潔められ心の一致が出来なければ合同なるものが出るものでない。たとひ出来るにしても其は合同でなく混同である」と述べ、また同年6月の「行詰れる基督教界」（大8.6.5）では、「日本の教会同盟が世界の政治家の尻馬に乗って国際同盟だのデモクラシーなどと大層な宣言書を出して見たが其も世間では左程思ふほど買ふてくれぬため今頃は四苦八苦の体である」と揶揄し、「元来我国には政治家擬の宗教家が牛耳を握つて居るから騒が多いほど実がない。如何しても今後の展開は聖霊によりて純福音を宣伝するに限る」と述べている。

これなどは明らかに先にあげた教会同盟の宣言書にたいする批判である。

このように中田は教会人が世俗の政治問題などに関して発言することを嫌い、聖霊による一致と魂の救済に専心すべきことを説く。先に指摘した教会合同のディレンマに寄せていえば、こうした超俗的な姿勢は、安易な合同を拒否することで、多数派の防護壁の外部に放り出されるとともに、やがて全体主義国家による弾圧にさらされることにもなった。もとより中田をはじめとするホーリネスの指導者たちが、国家政策に付和雷同する主流派を理論的に批判しうる高い見識をもっていた、ということではない。ファシズムとの癒着を回避しえたのは、意図的・思想的な判断ではなく、むしろ世俗への無関心が招いた予期せぬ結果だった。いずれにせよ、社会の瑣事に関わることを避け、ひたすら神の再臨を待ち望むという内閉的な生き方の強調は、この教会の人々の内部に強い信仰のエネルギーを蓄積させ、リバイバルという爆発を導く大きな原動力のひとつになったと考えられる。

1.3 再臨運動の余波

リバイバルが起きた大正8年の後半は、前年1月6日の「聖書の預言的研究演説会」に始まるとされる「再臨運動」が、一段落を迎えた時期でもあった。「一段落」というのは、キリスト教界を巻き込む賛否両論の応酬が、明確な決着を見ぬまま下火になったという状況をさす。その意味では、事実上の終息期ともいえる。大正7年の再臨運動といえば、一般には内村鑑三の名で知られている。たしかにこの運動が脚光を浴びたのは、キリスト教界のみならず思想界に強い影響力をもつ内村が、欧州大戦や娘ルツ子の死などを契機に「再臨」の教義を熱心に説き始めたことが、大きな牽引力となった。あえていえば、内村というスターの突然の「変節」が、主の再臨という近代では陰に隠されてきた教義に、新鮮な風を当てることになったのである。

この再臨運動の中心人物としては、内村鑑三、中田重治のほか、組合派の木村清松、武本喜代蔵、自由メソジストの河辺貞吉、聖公会の藤本寿作などがあげられるが、大正7年の前半に盛り上がりをもせたこの運動も、すでに6月には本郷教会で海老名弾正らを中心に基督再臨反対演説会が開かれるなど、再臨を歴史的現実のなかでとらえることへの抵抗は大きかった。8年の6月には、神田の青年会館が再臨運動講演への使用を拒否するといった反発も生じた。内村は再臨信仰を生涯捨てなかつたといわれるが、キリスト教界を揺るがした「運動」としては、ほぼ2年足らずで終息に向かうのである。

内村をはじめとする多くのキリスト教徒にとって、再臨信仰は新たに発見された驚きや感動を伴うものであったが、ホーリネス教会にとっては、四重の福音のひとつとして、当初から重視されていた当然の教義であった。彼らにしてみれば、再臨運動は内村によって始められたわけではなく、「天下の内村」がようやく真理に目覚めて歩み寄ってきた、といった気分であつたらう。とはいえ、それは歓迎すべき僥倖だった。信徒の

なかには、部外者との提携をいぶかる者もあったが、中田自身は「千年期前再臨説」という一点のみで一致するのだとして、内村らとの協力を推進した。内村の住宅は、ホーリネスの聖書学院から歩いて3分もないという淀橋柏木にあったが、それまで中田とはほとんど交流がなかった。再臨運動を契機に両者が一気に人間的に親しくなることはなかったが、以後、互いに一定の敬意を示す関係は保たれたようである⁷⁾。

大正8年1月の『聖潔之友』冒頭に掲載された「社説」(大8.1.23)で、中田は次のように始めている。「主の再臨は十年内にあるやうな気がすると或兄弟が申された。我等は或一派の如く再臨の時を定て騒ぐものでない。しかし時の表徴によりて考へ十年内にあるやうに思い居る事は福である」。ここで或一派とあるように、再臨運動の高まりのなかでは、特定の月日を定めて再臨の時を予言するような自称メシアたちも登場した。大正7年5月26日に横浜の青年会館で行なわれた春の預言大会では、700名もの聴衆が集まったが、そのなかにはみずから「仏陀であり、メシアである」と称する宮崎虎之助なる人物と、その弟子たちも含まれていた。また、『新約』という小説で反逆者ユダを中心としてイエスの生涯を描いた江原小弥太も、上野の山の階段を下りながら、「自分こそ再臨のメシアである」という自覚を呼び起こしたという⁸⁾。中田はこうした自称メシアや日時を限るような預言をきびしく批判したが、その一方では、先の引用にみられるように、みずからも「十年内」といった具体的な数字をあげて、切迫した再臨に備えることを説いたのである。

当時50歳の中田にとって10年という数字はすでに晩年の出来事に属するが、これを聞いた20歳前後の若者にとっては、まさに今後の人生観を考え直さねばならない切迫感をもっていたであろう。リバイバルを引き起こした要因のひとつとして、前年の再臨運動が果たした役割は小さくない。内村という権威の加入によって一定の社会的認知を獲得した再臨の教義は、間近に迫った世の終わりに備えるための信仰復興という強い自覚を、信徒たちのなかに呼び覚ましたと考えられる。

1.4 リバイバルへの構え

リバイバルが起こるということは、それがリバイバルだと認知されることが前提にあり、したがって、そもそもリバイバルとは何かということが、ある程度の共通理解になっていなければならない。あとで述べるように大正のリバイバルの始まりに立ち会った(あるいは、仕掛けた)中心人物と目される秋山由五郎は、若いころ、アメリカ西海岸でのリバイバルをみずから体験していた。リバイバルという言葉自体は、すでにキリスト教界一般で広く流通しており、とくに明治の10年代には、いくつかの大規模なリバイバルが記録されていた。ホーリネス教会でも早くから頻繁に説かれ、多くの会員には耳慣れた言葉になっていた。中田とともに初期の東洋宣教会を支えた笹尾鉄三郎(1868-1914)が、大正3年に早逝したときの辞世の言葉も「リバイバル、リバイバル、

リバイバル」だったと伝えられている。とはいえ、多くの一般信徒がそれを身近に起こりうる現実の出来事として受けとめるためには、少なくともリバイバルとはこういうものであるという、ある具体的なイメージが共有されねばならないだろう。これはどのようにして説かれ、植え付けられたのであろうか。

当時のホーリネス教会の機関紙『聖潔之友』をみると、とくに大正8年に入ってリバイバルについて書かれた記事が多くなることがわかる。すでにこの年の1月、中田は「新年の聖戦」(大8.1.30)という記事の冒頭で次のように述べている。「今年のリバイバルの年である。誰しもの感じを以て今年を迎えた」。さらに3月の「真のリバイバル」(大8.3.6)では、リバイバル現象の具体的な定義にも近いような解説がなされている。「基督教会内に現今でも奇蹟的の事があるのを見たいと思ふなれば聖霊の御働であるところのリバイバルを見るに限る。これはペンテコステ以来時々教会内に起りしところの霊的覚醒である。一個人のリバイバルは常にある。しかし此処にいふところのリバイバルなるものは教会全体又は国全体が霊の力に揺動かざる、といふ不思議なる神の御業である。(中略) 真のリバイバルは祈り祈つて遂に起りし天的運動で所謂大挙伝道式のものでなく何の広告がなくとも聴衆が自然と引付られて集り祈にも説教にも自由があり何等技巧を用ひずともどしどし悔改する者が起るといふ不思議な現象を指すのである」。そして、これは一日二日で消えるようなものではなく、一年も二年も続く性質もっているとされる。

4月には、小原十三司が、「リバイバルを見ん」(大8.4.24)という長い説教を載せている。当時彼はまだ20代で、みずからは具体的なリバイバルの体験はなかったが、次のような説明がなされている。「リバイバルは人間の工で無くて、神の霊の活動である。」「若し一つの町にリバイバルが起つたとすればその町に来る商人も、官吏も、旅人も覚醒する様になる。また実に剛情な人迄も救はれる様になる。又ならず者も救はれる様になる。夜遊をする青年男女も救はれる様になる。宗教の事なんか鼻であしらつて居る者も罪を悟つて悔改める様になる」「世の中が腐敗し、教会が動かぬ時にリバイバルが必要である」。さらに6月に入ると、「想苑」という欄で、「リバイバルの要素」(大8.6.26~7.10)という解説が3回にわけて連載された。ここではリバイバルの聖書の根拠や、アメリカで起こったリバイバルの実例などが紹介されている。

リバイバルが起こった大正8年11月という時期を考えると、もうひとつ注目しておきたいのは、ちょうどこの年からホーリネス教会ではクリスマスの祝いが全廃されたことである。10月の「降誕節の全廃」(大8.10.30)という記事によれば、その理由はいくつか挙げられているが、最も中心におかれているのは、じっさいのクリスマスは12月ではないという歴史的な理由と、最近のクリスマスはますます俗化して未信者たちが騒ぎまわる娯楽日になってしまっている、という理由である。とくに後者は、華やかな「バブル景気」の都市文化のなかで、クリスマスが歓楽街の祭日となり、非キリスト教

世帯の年中行事になりはじめていた、という現実への批判である。社会の俗化を嘆くホーリネス教会にとって、軽薄な都市文化におけるクリスマスの空騒ぎは、許せない冒瀆行為に映ったのであろう。他の多くの教会が最大の行事として重視し、信徒拡大の好機ともとらえていたクリスマスを、ホーリネス教会は今年から全廃すると宣言したのである。

年末が近づくなかで、ホーリネス教会員にとっては、待ち望むべきものはクリスマス楽しみではなく、世俗の害毒から逃れた真の信仰復興であり、主の再臨であることが強調された。リバイバル待望の気分を高揚させるひとつの手段として、クリスマスの全廃という荒療治が及ぼしたインパクトは大きかったといえよう。

1.5 リバイバルの始まり

残された諸資料から推測すると、リバイバルのきっかけを作った直接の当事者として、秋山由五郎(1865-1948)と柘植不知人(1873-1927)というふたりの人物が注目される。島地タイの「信州飯田のリバイバル」という回想⁹⁾によれば、事の起こりは大正8年の11月、信州飯田の教会で、多額の献金をした下平という信徒の父親の追善記念伝道会が開かれることになり、17日の夜、その祈りの準備をするために東京の淀橋教会で徹夜の祈り会が催された。秋山が中心となり柘植、それに小原十三司(1890-1972)、鈴木仙之助など数名が参加した。島地の叙述によれば、一同が祈っているとサタンも妨害をはじめ、眠らされる者、理屈を言わされる者も出てきた。一時はある一人(鈴木仙之助と思われる)が聖書知識や理屈をこねたため、会は重苦しい雰囲気になった。しかし、「秋山先生は、これこそ聖戦の邪魔するサタンのわざと申されまして、御一同この見えざる敵に向かって祈りは集中されました。なかなか頑固に頑張っておりましたが、とうとう主は勝ち給いまして、午前二時三十分つきぬけました。サタンは去りました。全き大勝利となり、大感謝で讚美しつづけました。まことにリバイバルの火の手はこの夜降りましたのでした。ハレルヤ」とある。午前2時半の「つきぬけました。サタンは去りました」という叙述は抽象的だが、およその雰囲気は推察できる。おそらく理屈で抵抗していた鈴木が泣いて悔い改め、全員が激しい喜びと感動に包まれ、泣きながら手を取り合う、といった状況が現出したのであろう。

秋山、柘植、小原らはその日の夜行で飯田に向かい、ここでも昼は静想会、夜は「サタン打ち」と名づけた祈り会が4日間にわたって続けられた。再び島地の回想によれば、「集会は始めより聖霊の臨在あざやかにサタンの妨害を許さず、聖書は旧約より新約より流るる如く御器を通してはたらき、探らるる者、掘り下げらるる者多く、涙とともに流しつつ悔いなく折れて祈り、ひたすら主の前にさげび求むる一つの声となり、俄かに天開かれた如く聖霊の大傾注となりまして、ハッキリと救わるる者、慰められた者、癒しを受けた者など続出、立ち上がって感謝する人、大ごえに讚美する者、先生方

は静かに聖霊の御はたらきを見つめておられました。かくてリバイバルの火の手は飯田に燃え上がりました」。

信徒たちの興奮の背後で、「先生方は静かに聖霊の御はたらきを見つめて」いたという観察も注目されるが、ともかくこの叙述からは、全員が一致した情熱を維持していたかのような印象を受ける。しかし、森山論によれば、この飯田の集会で「これから山に登って断食祈禱会だ」と提案したのは柘植と秋山の二人だったという。小原などは晩年になって、「やれやれ、何もかも注ぎ出して疲れ果てたから、早く東京に帰って休みたと思ったが、自分よりも先輩の先生方が断食するというのに、若い自分がいやとは言えないので、ついて行った」と述懐していたという¹⁰⁾。やや強引ともいえる方法を駆使してリバイバルを発火させたのは、秋山と柘植という二人の情熱的な伝道者であったことがうかがえる。

11月23日に飯田での聖会を終えた一同は東京の淀橋教会に引き返し、すぐに集会を続行させた。今度は「鈴木仙之助が火つけ役となり、次々に集会を整える。そこで、ご用をすると、それがみなリバイバルとなったのである」とされている¹¹⁾。このころ監督の中田重治は関西方面に出張していた。旅先で霊の異変を聞いた彼はすぐに東京にもどり、集会を指導したという。11月28日には聖別会が開かれ、30日の日曜日の礼拝では、「聖霊が降り、会衆は号泣の中に打ち崩れ、恵みの座も講壇も、泣き叫ぶ人々で満たされ、ある者は確実に救われ、ある者はきよめられた。会衆は時間が経っても帰る者は一人もなく、席を立つ者は外に出て悔改めの祈りをしては、また教会に戻ってくる。まさにペンテコステ的光景で、ぶっ倒れる者、踊る者、はねる者さえあった」といった状況となった¹²⁾。こうした雰囲気は、12月から年をこえて1月と、さらにエスカレートしていった。範囲も東京の諸教会から、地方の教会へと波及し、拡大していく。

機関紙『聖潔之友』でリバイバルの第一報が伝えられたのは、12月11日号で、「リバイバルの焰 燃え始む」という記事である。25日号には「リバイバル来れり」という記事も載るが、具体的な経緯を整理して報道したのは、年が明けた大正9年1月8日号に中田が書いた「東京のリバイバル」（翌15日号には続報がある）であった。おそらく、この時期になって、これが紛れもないリバイバルなのだという正式な認定が、監督の中田によってなされたと推察される。「此度のリバイバルは一時的のものではない事の確証が顕はれて来た」といった叙述もある。大晦日から元旦にかけての除夜祈禱会には、300余名が集まり、「手を拍つ事は勿論遂には三組も四組も輪をして舞踏するといふ光景を呈した。傍らでかうして居るうちに恵の座で泣倒れて居る者が起る、一騎打が始まる、信ぜられずに居る者を取囲んでエリコ式に祈り崩すといふ凄じい状態となつた」と報告されている。

ここで、リバイバルの開始に深く関与した4人の人物についてみておこう。

まず秋山由五郎であるが、彼は武蔵国の乾物問屋の子として生まれた。18歳で渡米、

シアトルでリバイバルに遭遇して受洗する。帰国後、笹尾鉄三郎、河辺貞吉らと「小さな群」のメンバーとして、初期の聖潔派を形成したひとりである。大正3年からは独立伝道者となり、ホーリネス教会直属ではなかったが、指導者のひとりとして信頼を集めていた。中田より4歳年長で当時は54歳。青春期にアメリカのリバイバルを体験した者として、日本でもリバイバルが起きることに人並み以上の情熱を傾けていた。

柘植不知人は広島県の医者の子として生まれたが、父を亡くして多難な幼少期を送る。大正2年に日本伝道隊のウィルクスの天幕伝道で受洗。40歳という当時としては遅い入信であった。しかし、大正5年には、大阪梅田駅前通りで聖霊に満たされるという体験をして、リバイバルリストとして活動をはじめた。のちに台湾伝道などで名を知られ、大正11年には日本伝道隊をはなれて、みずから基督伝道隊を組織する。昭和2年に急死するまで「活水の群れ」という独自のグループを率いるカリスマのリーダーとして活動したことは、つとに知られている。この大正8年当時は45歳。劇的な聖霊体験からわずか3年目の、激しい伝道の情熱に燃える時期であった。

小原十三司は、岩手県土沢の居酒屋の息子として生まれ、15歳で電信員として通信事業に従事し、盛岡の教会で中田重治の説教を聞いて受洗、聖書学院に入学する。戦後は淀橋教会を復興して、その主任牧師として名を残した。当時はまだ29歳の青年だった。

鈴木仙之助については、詳細は不詳だが、元警察官をしていた人で、聖書学院を卒業後、銚子ヘフジバ・ミッションで働いていた。癡者伝道でも知られ、教会内では安倍千太郎とともに「二仙人」とよばれた。このリバイバルでは、「常に小六かしい事のみを謂て居る鈴木仙之助兄などは全く火に打ちのめされて別人となつた」(「東京のリバイバル」大9.1.8)とされ、各教会にリバイバルを広める中心的役割を演じたのである。

このように、大正8年末のリバイバルは、再臨思想の高揚によって「今年はリバイバルの年」という期待が高まるなかで、直接的には秋山、柘植というホーリネス教会からは独立した情熱的な伝道者がきっかけをつくり、教会員たちがこれに引きずられるかたちで起こった。そして、最終的には中田の認定によってオーソライズされたのである。

1.6 奨励と自制

リバイバルの初期段階では、これを各地の教会に広めるため、やや「無邪気」とさえいえるような興奮状態の賞賛も行なわれた。たとえば大正9年1月の中田重治による「宜しく霊に満さるべし」(大9.1.15)では、霊に満たされて酔ったような状態になることを、飲酒にたとえて積極的に奨励している。もとよりホーリネス教会ではじっさいの飲酒は厳禁であった。しかし、ここでは「酒の量は増すものである」として、聖霊に満たされることも、器が大きくなれば量が増えると言われる。また「酔ふまで飲むべきである」として、「傍ほとりの人々が何とか思ふて居りはせぬかと氣遣つて居るうちはベン

テコステ式には成て居ない。宜しく破目を外した飲様をすべきである」などとも述べられている。

この時期、『聖潔之友』には、全国各地のホーリネス教会にリバイバルが及んだことが、続々と報告されている。仙台、札幌、桐生、長崎、大阪、山形など、それらは各地からの「リバイバル報」というかたちで紹介された。中田の筆による「火は九州まで」(大9.2.19)によれば、長崎で開かれた集会では、柘植、小原、中田が説教にあたったが、「随分の騒であつた。何にせ三人の酔払があたり構はず暴れ廻るのであるから、あちらの信者も教役者も始めのうちは飽気にとられたやうな風であつた」とある。

リバイバルが起こって数ヶ月がすぎるところから、ある種の行き過ぎの行為にたいして注意や自制をよびかける記事も目立つようになる。一方では、「探の言に反抗する勿れ。水を掛てはならぬ」(中田「リバイバルの時の心得」大9.2.12)とされるが、他方では、「火元争をしてはならぬ。手柄話をしてはならぬ」(中田「リバイバルの禁物」大9.4.1)といった警告もみられる。ある教会にリバイバルをもたらしたのは誰の祈りの効果なのかといった、いわば熱狂状態の優劣を競い合うよう風潮が出てきた証拠でもあろう。

1.7 全国リバイバル大祈禱会

大正のリバイバルがひとつの形をもった成果としてピークを迎えるのが、大正9年3月26日から30日まで行なわれた、日本全国リバイバル大祈禱会であった。発起人は、「秋山由五郎・御牧碩太郎・中田重治」と公表された。中田があえて最後になっているのは、これがホーリネスという一教派の大会ではなく、広く超教派的な祈禱会であることを訴える意図があったと思われる。要するに、今回のリバイバルがホーリネス教会という狭い世界の珍事ではなく、日本のすべてのキリスト者を巻き込む聖業なのだ、という訴えである。先に述べたように、秋山は独立の伝道者だった。また、御牧碩太郎(1870-1949)はバックストンのもとで修養し、日本伝道隊に籍をおく人物であった。もちろん大会の実質的な中心は、あくまでもホーリネス教会であり、純福音派または聖潔派といった自覚のもとに近い関係にあった、バックストン門下のグループや、自由メソジストなどが協賛したにすぎなかった。それでも個人的には、アライアンス教会の日本人教役者や、日本基督教会、メソヂスト、組合、聖公会、ヘフジバ・ミッション、同盟、美普教会などの教役者たちの参加もあった、と伝えられている。

ここに集まった人々が、最初からすべて、今回の「リバイバル」と称する出来事に共感を抱いていたわけではない。とくに熱狂的な礼拝の雰囲気などには違和感をもつ人たちが多かったことは、この大会後に寄せられた感想記からも読みとれる。たとえば一宮良吾は、最初はリバイバルの真相を疑っていた。「余りに皮相的なそして如何にも人工的臭味の猛烈なること、神の聖業と言わんよりも寧ろ一種の群衆心理の作用ではあるまいかとの疑問であつた」。しかし、大会に参加するなかで、彼のこうした疑念は偉大な

る神によって粉碎されたという（「リバイバルの感想」大9.4.8）。また飛内司という参加者は、「最初から私は全く傍観者の態度を取つて居りました。（中略）何となく群衆心理が働いて居るやうに見え、大分人工が加味されて居ると感じられたからです」と述べている。しかし、最終日の晩の集会で、彼もまた聖霊の渦中に投げ込まれたという。最後は「投じまいと決心し、決して渦巻に巻込まれまいと極力反抗して居た私を斯くも確実に捕へ給へる主を永久に讃美します」という文章で結ばれている（「渦巻きに投じまいと決した私を」大9.4.8）。これらはすべて機関紙に掲載された模範的な証言である。逆にいえば、この前半の疑念、つまりリバイバルと称する集会の形態に「人工的」「群衆（集）心理的」なものを感じたままで、早々に立ち去った参加者も少なくなかったと考えられる。

同様のリバイバル大会は全国各地でも開催された。5月11～16日には関西リバイバル大会が、5月18～21日には中京大会が開かれ、その後、北海道、九州でも行なわれている。

1.8 リバイバル的集会の常態化

冒頭でも触れたように、ホーリネス教会はこの大正のリバイバルをひとつの契機として、信徒数を飛躍的に増加させていった。それは古くからの信徒の活性化をうながし、旧来のキリスト教が近づけなかった階層からも新しい信徒を引き抜いた。リバイバルがもたらした信仰の活性化は、たとえば「丁度電流の絶えてゐる電球をいぢくつて電気がつかないつかないと困り切つてゐた所へ、俄然電流が来て火がついたといつたやうな具合」などの比喩で表現されている（安倍潔「昨今の注意」大9.4.15）。その一方で、「此儘では日本のリバイバルは下火になつて仕舞ひます」（西條弥一郎「私のリバイバルと其後」大9.6.24）といった焦りや危機感も叫ばれるようになる。

時の経過のなかで、熱狂的なリバイバルの雰囲気は消えていったわけではない。むしろそれはホーリネス教会の集会の標準的なスタイルになっていく。その意味で、大正のリバイバルは全国規模の超教派大会をもっていちおうの終局を迎えた、という言い方ができる一方で、むしろリバイバル的な集会がホーリネス教会の常態として定着していった、という言い方も可能である。この時期以降、「ホーリネス的」という表現は、なかば好奇と揶揄の入り混じったニュアンスを含みつつ、一般に「霊に憑かれた」とも表現されるような忘我的な体験や集会の形態をさす言葉として、広く社会に流通することになる。

こうした特徴は当然のことながら、他の教派や社会一般からの激しい反発・嘲笑・迫害を招くことにもなった。「他教会の信者も教役者も来かけたけれども、一寸集会をのぞきこんで、余の熱さで逃げ出したのが多かつたやうである」（「仙台のリバイバル」大9.1.29）、「近所の人々は『ヤソの気が狂ふた』と互に言つゝ、騒あつてゐる」（「大阪のリバイバ

ル」大9.3.4) など、各地からの報告にもその一端が示されている。大正9年5月の「仙台に於けるリバイバル其後」(大9.5.6)によれば、リバイバルが波及した仙台の教会で非常に熱心な三人姉妹がいたが、彼女たちは昼の3時という時間に、そろって「輝ける衣を付けた御方が顕はれて来た」という体験をする。その翌日から姉妹の一人は非常な迫害を受けることになった。それは反対する父親によって1ヶ月間手足を縛られ、ある時は白刃をもって強迫されるというものだった。しかし、強い信仰によって彼女はこの迫害に屈しなかったとされている。迫害の記述もさることながら、リバイバルの雰囲気の中かで3人の姉妹がそろって神の臨在を体験したという記述が興味深い。おそらく信徒たちのこの種の直接的な霊体験が、迫害や嘲笑にも屈しない強い信念を支えていったのであろう。これはリバイバルの体験主義がもつ積極的な効力の実例といえる。

1.9 再臨へ

再臨への「期待」に後押しされたリバイバルは、その展開の中かでさらにこの期待を強めるという、相乗効果をもっていた。そこでは「再臨まで」という目標が、明確に設定されるようになる。つまりリバイバルとは再臨の先触れであり、再臨の日まで継続されるべきものとなる。中田重治みずからが、この目標を明確に説くようになる。「火は一切の邪魔物を焼払ふから、そこに全き一致が行はるゝのである」(「リバイバルの結果」大9.3.25)、「リバイバルはこの時(主の再臨)まで続くべきである。(中略)オー全世界のリバイバル、これは早晚来るべきものである」(「大会終りしや」大9.4.8)。そこではまた、「未信者と提携する世の一切の宗教事業に関係せず」「一切の社会的運動に協賛せず」といった反世俗の姿勢がますます尖鋭化していく(「リバイバル大会宣言書」大9.4.8)。

具体的な期日を定める者は異端だといっていた再臨の時期についても、より具体的に切迫した数字が示されるようになる。たとえばこの年の5月の時点で中田は次のように明言している。「ギネス博士の言によれば一九二四年が大事である。あと五年といふ最も切迫した時である。これらの事によりて目醒る人は幸福なる人である」(「何時主は来り給ふや」大9.5.6)。一年半前に「十年内」とされていた再臨の時期は、リバイバルの体験を経て、すでに半分に短縮されている。

大正9年の年末にあたって、米田豊(1884-1976)が「リバイバルの年を送る」(大9.12.30)という回顧を書いている。米田はホーリネス教会の中なかでは、どちらかといえば冷静な理論家であった。同じ年の4月に発表した「リバイバル後の記」では「これまではある浅薄なアメリカのエバンゼリスト等がリバイバルの請負をするとか聞いた事などが連想されて、リバイバルなる語を乱用するのはよくないと思つていた」などと吐露しているように、慎重な面もみられた。しかし、この米田さえもが、今年1年を振り返って次のように述懐するのである。「然し是はリバイバルの初に過ぎぬ。モット強い、又モット純粋な、而してモット広い大リバイバルが是から起らねばならぬ。(中略)約

東の末の世の大リバイバルの手附である。ペンテコステ的リバイバルは是からである。其に達するには祈禱の継続戦をせねばならぬ」。

さらに強い、さらに純粋なりバイバルこそが、次に来るべき希望の光となった。それこそが、差し迫った再臨に直結する「末の世の大リバイバル」である。信徒たちの大きな「期待」に支えられた大正のリバイバルは、彼らの再臨の確信をいっそう強固なものにすると同時に、次に起こるリバイバルがあるとすれば、それこそが再臨へと一直線につながる最後のリバイバルなのだという、もはや引き返すことのできない道を用意することにもなったのである。

2 昭和のリバイバル

2.1 窮地のリバイバル

「昭和のリバイバル」は、昭和5年（1930）5月に始まり、教会に分裂騒動が起きる8年（1933）10月まで続いたとされている。大正のリバイバルから、ほぼ10年後にあたる。先ほどと同じように筆者の観点からこのリバイバルの特徴を一言で表現すれば、大正のリバイバルが「期待のリバイバル」であったのにたいして、昭和のそれは「窮地のリバイバル」と称することができよう。つまり、世俗に絶望した人々が、あらゆる退路を絶って、最後の望みとしての再臨にいたる一直線の道を、ひたすら突き進もうとしたリバイバルであった。

先にも指摘したように、大正のリバイバル以後、次に起こるべきリバイバルは、そのまま再臨の日につながる「最後のリバイバル」でなければならなかった。しかし、教会員をとりまく現実は一層厳しかった。近代日本のキリスト教派としては目ざましい成長を遂げたとはいえ、日本全体としては、取るに足りない少数派である状況に変わりはない。しかも教会の内外、あるいは国の内外をとりまく状況はむしろ悪化の一途を辿っていた。これまでの素朴で単純明快な路線では対処しきれない、さまざまな矛盾も顕在化しつつあった。たとえばそれは、脱俗と政治、自給と依存、キリストと日本、などの矛盾となって突きつけられた。

現実への行き詰まりと苛立ちは、新たなリバイバル、つまり最後のリバイバルへの期待を生む。それは「何としても神にやっていただかねばならぬ」という悲壮な願いに支えられていた。そして、今度のリバイバルこそ、いったん起こったならば、必ず再臨へと直行するはずであった。もしそうでなければ、彼らの世界観そのものが危機に瀕するであろう。次のリバイバルもまた一過性の出来事として終息するようなことがあれば、それは彼らの救済観そのものの崩壊を意味したのである。「この火は消せない」という悲壮感のなかで、リバイバルのエネルギーは過熱していく。いわばそれは「窮地のリバイバル」「片道切符のリバイバル」ともいえるものだった。

ここでもまず、昭和5年という時代状況から考えてみよう。出口の見えない長期的不況は、昭和3年の金融恐慌、4年(1929)10月にはじまる世界大恐慌によってさらに悪化した。東北地方の凶作も重なり、農村疲弊は深刻化する。リバイバルが起こった年である昭和5年、3月には失業率がついに5%を越えたと報じられた。その一方で、政界・官界・軍部の取賄汚職事件はあとを絶たず、共産党大検挙(昭和3年3月と4年4月)など、言論思想統制も厳しさを増していった。行き詰まった日本は大陸の権益拡大に活路を求める。翌昭和6年(1931)には満洲事変が起こり、それはやがて満洲国建国から五・一五事件(1932)、国際連盟脱退(1933)へと続いていく。ホーリネス教会における昭和のリバイバルとは、まさにこうした激動の時代のなかで起こり、進行し、教派の分裂という悲劇的な結末を迎えたのである。

2.2 脱俗路線の矛盾

一方で国家神道と皇民化教育を強化しようとする国粋主義思想、他方で反宗教的な色彩の濃い社会主義思想という、いわば右傾化と左傾化のはざままで、キリスト教界全体は教勢の行き詰まり状態にあった。こうした現状を打破するために、主流プロテスタント教会が打ち出したのが、「神の国運動」である。これを主催したのは、日本基督教会同盟が大正12年に改称した日本基督教連盟であった。「神の国運動」とは、伝道界のスター的存在だった賀川豊彦の提唱によるもので、これを連盟に属する各教派が支援したのである。運動が開始されたのは、まさにホーリネスに昭和のリバイバルが起こったとされる年、つまり昭和5年の元旦で、以後5年間にわたって継続された。

昭和5年はまた、3月にキリスト教界の大物、内村鑑三が亡くなった年でもある。もとより彼は主流教派の人間ではなかったが、こうした世間的ビッグネームが消えていくことは、教界にとっては大きな痛手だった。神の国運動は新たな伝道活動を推進しようとする窮余の策といえるが、同時にプロテスタント諸教派の合同への機運とも連動していた。すでに昭和4年には合同基礎案が公表され、その後も具体的な協議が重ねられていく。しかし、結局、教派間の合意は得られなかった。

当時のキリスト教界をとりまく深刻な政治問題といえば、宗教法案の行方と、いわゆる神社問題であった。これらについては研究も多いので詳細は省くが、要するに宗教法案とは、事実上の宗教統制法であり、とくにキリスト教にたいしては信徒の活動や集会を大幅に制限しようとする意図がこめられていた。そのため、すでに明治32年(1899)、昭和2年(1927)および4年(1929)と、3度にわたって政府から提案されたが、いずれも仏教界やキリスト教界の猛反対にあって否決または廃案になってきたという経緯をもつ。

また、神社問題とは、昭和4年12月に政府によって設置された神社制度調査会などの動きへの対応をさす。これは基本的には神社参拝を「宗教」から切り離し、全国民の

「道徳」として強要しようとする国家政策を背後におくもので、キリスト教界の抵抗は強かった。じっさい昭和5年に入るところから、一部のキリスト教徒の子弟が学校行事としての神社参拝を拒否したことが、社会的批判を浴びる事件が増えてくる。

宗教法案も神社問題も、やがて昭和10年代に入ると、キリスト教界の抵抗は急速に弱まり、むしろ妥協・協力というかたちでファシズムの波に呑み込まれていったことは、周知のところである。懸案の教会合同が昭和16年（1941）に日本基督教団の結成によって実現したのも、国家権力によるなかば強制の産物であったという、皮肉な結果に終わったのである。

こうした一連の主流派の動きにたいして、ホーリネス教会が取ったスタンスは、もはや大正期ほど単純なものではなかった。基本的な立場としては、社会問題・政治問題への関与は否定された。社会事業を重視する賀川豊彦の運動などにたいしては、「救霊が余りに忙しいので、そんな事に金と時と力を出して居られない」（中田「我等が社会事業に関係せざる理由」昭2.9.29）と冷ややかで、基督教国際連盟への加入の動きなどにも、「全世界を通じて基督の再臨を信ずる者は、かゝる運動に加入しない。何もすねて加入しないのでない（中略）主の来り給ふ日が近い。されば余計な事に手を出さずに、一意専心個人々々の靈魂を救ふ事に全力を注ぐのである」（「基督教国際連盟に加入するの可否」昭2.7.28）といった主張が展開された。

昭和5年2月には、間近に迫った総選挙に向けて、キリスト教各教派は「クリスチャン代議士」を増やすための宣伝活動などを推進していた。宗教法案への対処などを考えれば、当然の動きであろう。しかし、中田重治はこれにも冷たい論評を浴びせている。「聖徒の選挙観」（昭5.2.13）では、「我等は教会としては決して政治に関係せぬやうにして居る」としたうえで、ホーリネス教会員によびかける注意事項というかたちで、「棄権したとて罪にはならず」「基督教の教役者中に候補に立つ人あらば、主の御栄光の為に落選するやうに祈る事」などを挙げている。消極的ではあるが、信徒に投票への棄権を勧め、クリスチャン代議士の落選を祈るべきだと訴えているのである。「我等は国内に良政治が行はるるやうにと願ふて居る。しかし聖書により此世をば邪なる世と見て居るのであるから、余り多の期待を有して居ない。何も基督が再臨するまでの事と信じて居るから、何党が政権を握つたとて、似たりよつたりのものと思ふて居る」という理由からであった。

しかし、その一方で、神社問題に関する中田の姿勢には、こうした批判を忘れたかのような熱い政治的発言が顔をのぞかせている。たとえば、昭和5年1月に発表された「神社問題に就て」（昭5.1.30）では、神社は宗教ではないという当局者の言にたいして、「雨乞、日乞、商売繁昌、五穀豊穰、無病息災」などの例をあげ、神社は「宗教として貧弱であるにしても、これほど一般人民の生活と親しき関係を有して居る宗教はあるまい」と指摘し、さらに自分たちはクリスチャンとして、いかに迫害されても絶対に神社

は拝まない、と言い切っている。昭和5年5月に、主要プロテスタント教派は合同で「神社問題に関する進言」を発表した。その骨子は、もし神社が宗教でないというなら、祈禱・祈願・神札や護符の授与などは止めるべきであり、もし宗教だというなら、それを国民に強要すべきではない、という主張であった。ここには30以上の教派が名を連ねているが、これまで政治的宣言にはいっさい関与してこなかった日本ホーリネス教会が、日本組合基督教会・日本基督教会・日本メソヂスト教会・日本バプテスト教会につづいて、5番目に名前を出している。

後述するように、この時期、ホーリネス教会員は全国各地で神社参拝拒否によるトラブルに巻き込まれるケースが増えていた。さすがの中田重治も、もはや「世俗に関与せず」などとは言っておれない深刻な状況に追い込まれていたのである。神社問題は、世俗の政治などには関与しないという彼らの一貫した路線に、根本的な矛盾をよびこむ刺となった。

2.3 リバイバル集会の常態化と変質

すでに指摘したように、大正のリバイバル以降、リバイバル的集会は彼らの常態となり、世間一般でも「ホーリネス的」という言葉が熱狂的な礼拝形式の代名詞にまでなっていた。また、次に来るべき本当の大リバイバルとは、携挙に到るリバイバルだといった発言が頻繁に語られるようになる。携挙とは、再臨にあたってまず忠実な信徒だけが天に携え上げられることをいうが、多くのキリスト教徒は聞いたこともないこの教理が、ホーリネス教会では日常の言葉として語られるようになる。機関紙でも、「主が再臨し給ふ時に日本からも多の聖徒が携挙せらるゝやうにと願ふ為である。(中略)大リバイバルを願ふも之が為である」(「来るペンテコステ」昭2.5.5)といった文脈で用いられた。

リバイバル的集会の常態化を示すひとつの例として、昭和3年4月に行なわれたリバイバル年会の様子を記した報告の一部を引用してみよう。「次には一同起立して感謝の大合唱となった。『いざ戦はん、いざ戦はん』を何度も繰返す。其中監督は感極まつて歩き出す、其後へ次から次と誰指図するとなく福音使皆行列をなして場内を廻つて練り歩いた。一回又一回、傍聴者信者姉共に力の限り合唱して声援する。マルデ競争者をでも応援するやう。ピアノは弾ぜられる、ラッパは吹かれる、太鼓さへ打たれる。エリコ城を廻つた行列もかくやと思はるゝ讚美隊の行進は実に熱烈で真剣だ見よ皆の目に涙がある。金森先生は列頭に手を挙げて進んで居られる。誰が此有様を見て狂態よ兎戯よと笑ふ者ぞ。聖霊に満たされ酔されたのでなくて誰がこんな真似が出来やう。見よキルボルン夫人とヒチコック兄は場の一隅で此光景を見てワンワン泣いて居る。やがて此行列は皆講壇上に上り『いざ戦はん』は尚止まぬ。金森先生も手を拍つて喜んで歌つて居られる」(「画期的リバイバル年会」昭3.5.10)。

一般論としていえば、熱狂や感動はさらに大きな刺激を求めて次々にエスカレートしていく。だが、性欲・物欲・権力欲などと同じように、こうした熱狂や感動はどこまでエスカレートさせても果てがない。というより、どこまでエスカレートさせても、しょせんは熱狂や感動にすぎない。個々の集会在熱狂と感動に包まれることは信徒たちにとっては恵みであろうが、さらに大きな「最後のリバイバル」が待望されるとき、それは今までの熱狂や感動と「質的に」どう違うのか、といったことが問題にならざるをえなくなる。ホーリネス教会においても、最初のリバイバルから10年近くを経て、熱狂スタイルの集会在恒常化するなかで、あらためて信仰の質が問い直されるようになる。たとえばそれは、「真のリバイバルを導くのは聖潔と祈り」といった言葉で表現された。「オ、このリヴィヴルを始めて頂く前に、先づ神の聖前に我等一切の罪の赦しを乞はねばならぬ。リヴィヴルは来る。然しよい加減では来ぬ。徹底的に聖潔られ、ペンテコステの時の様に命懸けで祈らねばならぬ」(一宮政吉「リバイバルの方式」昭3. 4. 26)。

初期のころの、飲酒にたとえた聖霊体験の称揚などは影をひそめる。むしろ単なる騒ぎを求める姿勢が戒められる。集会のメインは、すべての罪を告白して利己的な自我を焼き尽くす、徹底した悔い改めにあることが強調される。自分が包み隠してきたあらゆる恥ずべき罪を告白させる「探りの霊」の働きが重んじられた。昭和5年4月のホーリネス大会では、はじめて「證詞の一斉射撃」という表現が用いられる。参加者が相手を見つけては、自分が犯してきた罪のすべてを一齐に告白し合うのである。大会の参加者は3,000人で、これはホーリネス教会がこれまでに国内で開いた集会では最大の人数であった。ちなみにこの数字は、その前の月に賀川豊彦が「神の国運動」の宣教として行なった講演会の参加者とくらべると、ほぼ2倍の人数だった。この大会ではまた、太鼓、タンバリンの使用が禁止・否定された。真のホーリネスのリバイバルとは、楽器に頼る大騒ぎではなく、個々の信徒の徹底した悔い改めと聖潔にある、という理由からであった。そして、昭和のリバイバルとよばれる一連の出来事が起こったのは、この大会から約1ヶ月後のことだった。

2.4 矛盾・葛藤の諸相

アメリカに本部をもつ東洋宣教会(OMS)と、日本のホーリネス教会とのあいだには、当初から一定の緊張関係があった。後者は前者にたいして財政的に大きく依存しつつも、外国人宣教師の支配を受けない日本独自の教派を守りたいという願望も強かった。欧米ミッションと日本人教役者との葛藤・軋轢は、近代日本の多くの教派に広く見られた現象であるが、比較的良好な協力関係を維持してきたカウマン、キルボルンと中田重治とのあいだにも、たとえば明治44年の「聖教団事件」のように、あわや分裂かと思われるような対立を生じた時期があった。

昭和3年4月、ホーリネス大会第10回年会の席上で、中田はホーリネス教会の完全

自給と福音使（牧師）の無給制を突然発表する。これは彼がOMS総裁のキルボルンと会った際に、財政状態が厳しいという話を聞かされたことから決断した結果だという。これが純粋にOMSの財政事情によるものか、あるいは中田のリーダーシップのもとに孤高の路線を突き進む日本のホーリネスへの圧力だったのかは、不明である。いずれにせよ、今後日本のホーリネスは海外の資金援助にはいっさい頼らないとされ、したがって、全国の各教会も完全な自給体制をとり、本部からの資金援助や給与の支給などは行なわない、と宣告されたのである。

この中田の提案にたいして、地方教会の福音使などから異論や反発が出たという記録はない。終末のリバイバルを待望する彼らにとって、日々の生活費への不満などが口に出されることはなかった、ということだろうか。それとも、圧倒的な支配力をもった監督の発言に逆らうことなど、もはや不可能な雰囲気が充満していたためだろうか。たしかに、この無給制という、いわばみずから崖淵に追い込むような決断を経て、教会員たちのリバイバルへの願望はいっそう強められたようである。中田は自給宣言直後の機関紙の冒頭に「純信仰生活」（昭3.5.3）という文章を載せて訴えている。「大リバイバルが起つて靈魂さへ救はれさへすれば、生活問題などは自然と解決せらるゝのである」「これ（無月給制度）はリバイバルの始めである」。

中田重治という個性的なリーダーの独裁的ともいえるような指導のもとで、こうした独自路線をひた走る当時のホーリネス教会にとって、心強い賛同者として歓迎されたのが金森通倫（1857-1945）であった。金森は肥後国に生まれ、明治8年に同志社英学校に入学し、新島襄から受洗する。その後、いわゆる新神学に傾倒し、実業家となって地方改良運動などにも関与するが、妻の死を契機に組合教会に復帰する。さらに大正3年には救世軍に入るが、同6年には脱退。昭和3年にホーリネスの活動に共鳴して入会したという経歴をもっていた。その後、昭和7年にはホーリネスも脱会し、晩年は湘南に隠居して「今仙人」などとよばれたという。良くいえば自由奔放な、悪くいえば勝手気儘な変節を繰り返した、個性的な人物であった。

ホーリネス入会当時はすでに世間に知られた名士であり、中田も金森の入会を喜び、教会の看板たりうる権威として重んじた。先に引用した昭和3年4月のリバイバル年會でも、「金森先生」として重んじられていることがうかがえる。金森はみずから「百万救霊運動」を提唱し、靈魂狩（たましひがり）という言葉で会員たちを鼓舞した。本人の意図は別として、これは主流教派が推進する「神の国運動」に対抗する強力な旗印となった。聖霊に満たされて踊り回る状態に、「聖霊踊り」などという巧みな命名もしている。彼は昭和5年1月には渡米し、リバイバルの開始時には日本にいなかったが、その旅先からの私信では、「今年はいよいよリバイバルだと信じます。もう疑ひません」（「金森先生の私信」昭5.5.1）というみずからの信念を表明していた。社会的に奇異や軽蔑の目で見られがちな教会にとって、「金森先生」という権威の発言は、確実なりバイバ

ルの到来を確信させる大きな力になったと考えられる。

当事のホーリネス教会（というよりも監督の中田重治）が陥っていたもうひとつの矛盾は、キリスト教という普遍主義と、日本という個別主義とをめぐるものだった。ホーリネス教会は、大正13年ころから、積極的な海外伝道に乗り出す。その伝道先は朝鮮、台湾、マオリ、ブラジルなどで、明らかに国家の軍事的な海外進出に便乗した地域であった。その相手は、土地の先住者も念頭におかれていたが、実質的には、まずは植民地政策のなかで海外に派遣されたり移住した邦人が中心だった。

昭和4年の3月から11月にかけて、中田はブラジル、イギリス、アメリカなどを外遊する。イギリスでは「日本のウェスレー」などと、もてはやされたという。彼は青年時代にアメリカにわたり、シカゴのムーディ聖書学院で聖霊体験をしており、英語も堪能だった。外遊経験も多く、当時としては貴重な国際人になりうる条件をそなえていた。しかし、いわゆる「親米派」といえるかどうかは微妙なところがある。とくにこの昭和4年の旅行では、行く先々で日本にたいする反感や、辛口の批評に直面して辟易したようである。そうしたなかで彼の愛国心が膨らんでいく。海外経験がむしろ「日本人」という自覚を高めた典型といえよう。彼は旅先の港で日の丸をつけた船を見つけると思わず涙が出た、と述懐している。帰国後に書かれた文章には、「十字架よりも、キリストの福音をあらはすに適当なものはこの日の丸であらう」（「日本ホーリネス人の世界的使命」昭5.1.2）などの文言もみられる。のちに教会分裂の一因となり、戦後には批判を受けることにもなる彼の国家主義への傾斜は、すでに昭和のリバイバルをよびこむ葛藤のなかにも組み込まれていたのである。

2.5 リバイバルの始まり

戦後のホーリネス教団では、昭和のリバイバルを仕掛けたのは中田重治の妻あやめだった、という話を伝える人たちがいたという。中田あやめ（1881-1939）は重治の二番目の妻で、当時は聖書学院の若い修養生たちを監督する立場にあり、修養生たちからは「ママ様」とよばれて精神的に彼らを束ねる役割を果たしていた。このあやめが、修養生たちを炊きつけてリバイバルのきっかけとなる火を起こした、というのである。この頃、彼女は家庭内に大きなトラブルをかかえていた。それは中田重治と亡き先妻の息子である羽後との葛藤である。不仲は前年の昭和4年には決定的となった。羽後は教会から距離をおくようになり、あやめは教会内における実質的な権限を強めていった。彼女がリバイバルを仕掛けたという説の真偽は確認できないが、その始まりといわれる出来事が、聖書学院の若い修養生たちのなかから起こったことは事実である。

当事者のひとりである半田晴信による「今のペンテコステ」と題する手記は、その様子を伝える資料として貴重である¹³⁾。やや長くなるが、核心部分を引用してみよう。「かくして遂に一九三〇年五月十九日の夜が訪れた。その夜は七時半から男女連合の祈

禱会が例の如く左側の教室にて持たれた。いつもの如く椅子、テーブルなどは片づけられ、筵敷の床の上に座布団を敷き、約六十名の男子、五十名の女子修養生が集まった。ちょうど中田監督は満洲に旅行中で御不在だった。監督夫人出席、一宮先生司会の下に集会は進められ、霊的圧迫が次第に加わり、いやましたかまった頃、突然兄弟等が悔い改め出した。(中略)泣きつつ躍り、また多くの者は組み合って踊り、ここにいわゆる聖霊踊りが始まった。遂に総崩れとなり、声も出せず、『おお!主よ!主よ!』と呼びつづけた。遂に大賛美となり、涙を流しつつ歌う様は、何とも言いようのない物凄さであった。(中略)午前五時半、男子早天祈禱会が昨晚の教室の裏手にある畳敷祈禱室にて開かれ、朝食のベルの鳴るまで三十分ばかり、熱烈なる祈りが捧げられた。やがて廊下伝いに食堂に行き、男女修養生共に食事し、食後の感謝について家拝が始まった。監督夫人が聖言を取り次がれ、一同は水を打ったかの如く静かに聞いていたが、やがて祈りに移ったその瞬間に爆発(リバイバル)は起こった。しばらくすると祈りが踊りとなった。躍っているうちにテーブル、椅子が片づけられ、場所が広がった。男子組は互いに組み合いつ抱き合いつして歌い躍っていたが、遂にあの堅牢な食堂入口の床板が、一間半四方ばかり、ドスンと落ちてしまった。ちょうどその時車田先生がおいでになった。先生も驚いておられたが、そのまま祈禱をなさった。/その時監督夫人より、カウマン・ホールに移るよう命ぜられ、皆いっせいに引き移る。そこで同じくリバイバルが投下せられた。一宮、車田両師、中田夫人、竹内老師、修養生全部とで祈禱会が始められ、またもやただならぬ集会となり、狂喜乱舞が始まった」。

たしかに中田夫人が終始流れをリードしている気配がうかがえる。とくに注目すべきは、「監督夫人が聖言を取り次がれ、一同は水を打ったかの如く静かに聞いていたが、やがて祈りに移ったその瞬間に爆発(リバイバル)は起こった」という部分である。「聖言を取り次がれ」というのは単なる聖書の一節を語ったということかもしれないが、あるいは一種のトランス状態での預言的な語りだった可能性もある。こうした監督夫人による聖霊の「取り次ぎ」が恒常化していたとすれば興味深い。いずれにせよ、これを契機として「爆発(リバイバル)は起こった」のである。

ここに名前が出る教師のうち、「車田先生」はよく知られた車田秋次(1887-1987)だが、「一宮先生」とは一宮政吉(1884-1954)である。淡路島の生まれで、神戸の中学校時代にメソジスト宣教師から受洗した。その後救世軍に入り佐官にまで昇進するが意見の相違からここを去って、ホーリネス教会に加入する。聖書学院の教授をつとめ、猛烈な伝道で知られていた。この当時、一宮は46歳、車田は43歳、中田あやめは49歳だった。ちなみに中田重治は59歳だった。昭和のリバイバルは、聖書学院の修養生らが中田夫人の強い指導のもとにきっかけを作り、一宮、車田らの教師がそれに追随するかたちで開始された、と見ることができよう。

機関紙『きよめの友』では、5月29日号に掲載された「火が燃えだした」が第一報

である。これは米田豊の筆になるもので「5月21日記」とされている。6月5日号には、やはり米田による「リバイバル中ば」が載る。これは「5月29日記」とある。さらに6月12日号には山崎鷺夫による「火は燃えている」という長い報告が掲載される。これには6月5日という日付が記されている。それによれば、5月20日以降、聖書学院ではリバイバルの熱気が持続し拡大をつづけた。旅先の満洲でこの報を聞いた中田重治は、急遽予定を変更して帰国。25日の日曜日の朝10時半に、修養生らが歓呼の声で迎えるなかを帰院した。そして、この日の聖日礼拝は「そのすさまじさ、とても今までの大会どころでない」という興奮の渦となった。ここでも「證の一斉射撃」が行なわれたとある。その一方で、「だが鳩が豆鉄砲を食った様に何が何やらサッパリ解らず、少しもリバイバルに対する欲求を持たぬ人々もあつたことは否まれぬ事実である」といった記述がある点も注目される。

機関紙に報じられたその後の経緯を追えば、このリバイバルは東京全域に広げなければならぬ、という使命感のなかで、教師たちは毎晩車で各教会をまわった。当時東京には約40のホーリネス教会があったが、そこでも聖書学院と同じようなりバイバルが起こったという。やがてそれは、大正の時と同じように全国のホーリネス教会へと広がっていった。

2.6 安東の神社問題

東京の聖書学院でリバイバルが起こったとき、中田重治は満洲に旅行中だったと述べた。この旅行の最大の目的は、安東で発生した神社問題にからむ信徒の迫害事件への対処であった。この事件の経緯については、当時の安東教会の福音使、吉持久雄による「安東高女に於ける神社問題」(昭5.6.12～)「其の後の安東」(昭6.3.5)などに詳しい。要約していえば、安東高等女学校には当時ホーリネス教会の信者・求道者が20名あまりいたが、4月4日の新学期始業式の日校長は全校生徒に安東神社への参拝を命じたところ、教会信者の3名がこれを拒否した。この事態に学校側は「神社参拝せざる者は不忠の臣である」などの理由で、生徒がホーリネス教会に行くことを禁じ、2名を無期停学の処分にしたのである。

この安東高女の戸塚という校長は、日本基督教会の長老をつとめるクリスチャンで、同校には元自由メソジストの伝道者をしていて羽田文次郎などという人もいて、校内で緑聖会という組織をつくり、毎週キリスト教の集会を開いていたという。つまり、クリスチャンの校長が神社参拝を拒否した生徒を停学処分にしたのである。もとよりホーリネス教会の活動への苦情や神社参拝拒否への非難は、他の一般生徒の父兄たちからも学校に寄せられていたようで、この事件を校長の個人的責任に帰することはできないが、ここには当時の主流派キリスト教徒の思想性と、ホーリネス教会がおかれていた周縁的・孤立的な立場が、はっきりと示されている。処分を受けた生徒のひとり大場榮子(当

時18歳)は、最終的に自主退学したが、「最後迄戦つた私の證」(昭5.6.26)という手記を『きよめの友』に寄せている。

中田はこの事件の対応に苦慮し、現地で孤軍奮闘している吉持を激励するとともに、何らかの打開策を探るために現地を訪れたのである。結果的には、さほど有効な手を打てぬまま、東京のリバイバルの知らせを受けての帰国となった。中田は8月に「安東県の築城」(昭5.8.21)という文章を書いて、あらゆる世間の迫害に屈しない決意を表明している。しかし、こうした神社参拝に関わる迫害事件は、その後も起こった。島根の浜田女子師範学校では、ホーリネス教会への出席や教会関係者との交際を禁止し、従わない者は退学させるという校長の命令が出された(「第二の安東事件 浜田女子師範の迫害」昭5.10.9)。茨城県の土浦では、神社の祭りに参加しない信徒の家を、神輿をかついだ青年たちが押しかけて打ち壊すという事件も起きる(「土浦神輿事件報告」昭5.11.13)。翌昭和6年の秋には、宮崎県都農町で類似の迫害事件が起こっている(「またも神輿事件」昭6.9.24)。中田は神社参拝せぬ者は国賊という非難にたいして、再三反論している。「神社参拝をせなければ軍神の精神にもとるといふならば、余りに思慮が足りない言分でなからふか。(中略)真の基督信者は忠臣二君に事へぬやうに、唯一の神の外に神ありとせず、また偶像及び偶像に類したる者に決して礼拝をせざる者である」(「軍神と神社参拝」昭7.11.3)。

このように、昭和のリバイバルの裏には、神社問題に関してホーリネス教会が追い込まれていた苦境が存在した。というより、リバイバルが全国に波及するなかで、迫害もさらにエスカレートしていったという点で、両者はまさに表裏一体の関係にあったといえる。

2.7 批判・反発・無視

6月以降、各地のホーリネス教会で、次々と「リバイバル聖会」が開かれた。それは門司、広島、岐阜、甲信、関西、阿蘇、東北、箱根、桐生、鹿児島など、全国に及ぶ。リバイバルは激しく燃える火にたとえられ、各地への波及は「飛び火」「延焼」とよばれた。中央で起こったリバイバルが地方に飛び火・延焼すれば、それはいっそう「本物のリバイバル」の証しとなる。その意味で、地方の会員にとって、自分たちの教会にもリバイバルの火の手が上がることは、差し追った要請となった。

その一方で、他の政治勢力からの批判や反発を受けることも多くなる。東京の田端教会では、「特別伝道会の第二日目の夜から、教会から通りへ出る突当りのミシン屋で先づ反旗をあげました。キリストと佐倉宗五郎とを対照してキリスト攻撃文を貼り出しました。次でキリスト亡国論、質疑応答と書いたものを出してあります。尚進んで教会の前の塀の端れに、神国のパチルス、クリスチャン撲滅と書いて貼り出しました」(「田端ホーリネス教会報」昭5.7.24)。これは国粹保存研究会を名乗る団体の仕業だったが、先の安

東の例のように、地域の一般住民からも奇異の目で見られるケースは多かった。

一方、キリスト教各派の反応はどうだったのであろうか。「リバイバルが起こった」とするホーリネス教会の動きを、他の諸教派はどのように受けとめたのだろうか。一言でいえば、完全な無視であった。この時期、他教派の機関紙などを点検してみても、ホーリネス教会に起こったとされるリバイバルの報道や論評は皆無に近い。ただひとつ、東部バプテスト機関紙『基督教報』（昭5.6.12付）の「主張」という欄に、「聖霊の降臨」と題する次のような論説が見られる。「聖霊降臨を大風の吹き来るに求め焔の火に求むる事も深刻なる宗教的経験の言語的表現として差支なからう、されど『祈禱の自由な事は驚くばかり、一群が坐りこむと三度や四度は交互に大抵皆祈る、果ては讚美と踊りで溢れ出る。近所からの苦情も持込まれる……我等は聖霊の異常なる御働きを只管待望んで居る』などと云ふ方面の事のみであつたら吾々はそれが果して慕ふべきものであるかを疑はざるを得ない」。この二重括弧の引用部分の出拠は明記されていないが、実は、先にも触れた6月12日付けの『きよめの友』でリバイバルの到来を報じた、山崎鷲夫の「火は燃えている」という記事の一節である。

こうした表立った批判はむしろ珍しい例で、多くの主流教派からは完全に無視されていた。その意味で、ホーリネス・リバイバルとは、文字通りホーリネスという一派と、それをとりまく一部の人々のあいだで認知された出来事であった。

2.8 秋の全国リバイバル大会

大正のリバイバルがそうであったように、昭和のリバイバルもまた、超教派を建前とする全国的な大会でひとつの頂点を迎える。これは秋の全国リバイバル大会と称して、昭和5年10月22日から26日にかけて開催された。代表の大会委員は「御牧碩太郎・中田重治・土山鉄次」と発表された。御牧と中田は大正のときと同じだが、今回はともに満60歳を迎えていた。土山鉄次（1885-1946）は日本自由メソヂスト教会に属し、この当時は45歳だった。

大会の様子は、たとえば次のような描写から推察できる。「彼方からも此方からも力を込めた祈禱が出る。未だ終らぬ中に祈り出す。二三人一緒に祈り出して暫くして気づいて一人がやめるといふ有様。立つて祈る。手を撃て祈る。拳を固めた両手を以て空を撃つて祈る。遂に二三人混線して終ひ、司会者の言なきに全会衆一緒に祈り出して終つた。何様祈りたくて祈りたくて仕方のない人許り故、祈禱の声が大河の決する勢にてまことにすさまじい」「聖霊は自由を与へる。縛るもの窮屈にするものは何であつてもひんむけるものならひんむき、脱げるものなら脱ぎ、自由の活動を邪魔する一切のものより離脱せよ」（『リバイバル大会記』昭5.10.30）。たんなる大騒ぎではなく、個人の内面のすべての罪をさらけだして祈る態度が強調された。

今回の大会でも、ホーリネス教会の範囲にかぎられない超教派性がうたわれた。じっ

さいの参加者は、自由メソヂスト、ナザレン、日本伝道隊、復興教会はもちろん、ライアンス、同盟教会、救世軍、メソヂスト、組合、日基、四谷ミッション、エホバの教会、活水基督教伝道、などに属する教役者・平信徒の個人的参加があったと報じられた。そして、大会後の『きよめの友』には、こうした他教派に所属する人たちの賛辞が、「大会所感」というかたちで積極的に掲載されている。しかし、先にも述べたように、プロテスタント主流派を大きく巻き込むような潮流にはならなかった。

大会の標語には「霊政復古」「聖霊の云へる如くせよ」などが掲げられた。また、この大会の賛同者を中心に、超教派の「再臨準備リバイバル同盟」といった組織も設立された。大会を前にして中田は、次のようによびかけていた。「主はすでに火を燃し給ふた。此火は主が再臨し給ふ其時まで燃え続かねばならぬ質（たち）の火である。来る大会は此火を燃していたゞく為といふよりも、此火の流に来る者が皆投ずるやうにして貫ふために開くのである」（「来月の大会」昭5.9.25）。

興奮と熱狂に包まれたあらゆるイベントがそうであるように、こうした大会は盛り上がりれば盛り上がるほど、終了後にはある種の虚脱感と寂寥感が訪れる。しかし、今回のホーリネス信徒には、そうした祭りの余韻に浸っている余裕はなかった。逆に、それは許されないことだった。この大会は年に一度の祭りではなく、そのまま再臨の日へとなだれ込む「最後のリバイバル」であり、中田がいうように、「主が再臨し給ふ其時まで燃え続かねばならぬ質（たち）の火」だったからである。緊張感とエネルギーを持続させるため、教師たちの苦闘はつづく。大会後、米田豊は次のような新たな目標を示して、信徒たちを鼓舞している。「大会終つて茲に十数日、唯の火気で大会騒ぎをしたり、所謂大会気分酔つて有頂天になつて居た者は、今や火気や酔は冷める時分である。（中略）我等は此時リバイバルは何かと新しく考へて見る必要がある。リバイバルは大会にのみあるのでない。（中略）末世の大リバイバルは是からである。されば今迄のやうな事で満足してはならぬ。火はカルメル山上に下つた。（中略）然し新鮮の火によりて祈禱の霊を受けた者は、恵の夕立が沛然として全地に下るまで、是から大に祈り続けねばならぬ」（「火の次は大雨を」昭5.11.13）。

2.9 期待から苛立ちへ

最後のリバイバルは始まったはずなのに、再臨はなかなか訪れなかった。それどころか、ホーリネス教会をとりまく環境は、ますます混迷と悪化の度を加えていった。自分たちが信じるリバイバルを受け入れないばかりか、迫害さえ加えようとする他教派や世間一般にたいする失望は、やがて苛立ちと怒りに変わっていく。こうしたなかで、世俗の問題には関与せず、ひたすら主の再臨を待ち望むという姿勢は、いっそう徹底されることになる。中田はすでに秋のリバイバル大会に先立つ9月の機関紙に、「ホ教会員への警告」（昭5.9.4）という文章を掲げ、教会員が守るべき注意事項をこまごまと列挙し

ている。そのなかには、たとえば次のような項目がみられる。「同盟罷工や同盟休校のやうなものに加担すべからざる事／政治問題には萬やむを得ざる事の外関係すべからざる事／神社費の如き偶像に関する事には一銭たりとも払ふべからざる事／産児制限などは毛頭口にすべからず／離婚する者をば教会より除名すべき事／白粉をつけたり、婦人が断髪したり、袖無の洋服や、裾短かのスカートを着る事を許してはならぬ」。

中田は神社問題では珍しく他教派と協同した。「政治問題には関係すべからざる事」という文言のあいだに「萬やむを得ざる事の外」という限定句を差し挟まざるをえなかったのも、そうした苦しい事情を物語っている。しかし、リバイバル発生以後は、再びかたくなな孤立の態度を深めていった。翌6年1月の「合同の二動機」(昭6.1.29)では、「何処の国でも聖潔派の人は確信によりて動く事はするけれども、事務的の頭がなく、団体的の事は余り考えぬ方である」と述べている。冷静な現状分析というより、やや自虐的な開き直りにも聞こえる。弘前出身の中田には、朴訥な信仰に生きる東北人的な気質への自信や誇りとともに、柔軟で洗練された(かに見える)都会的な主流派の教会人にたいする一種のコンプレックスのやうなものがあったのかもしれない。最後は次のやうな文章で結ばれる。「どうせ我等は主が再臨し給ふ時には嫌も応もない、其聖前に相集ふやうになるのである」。俗世間でいかに小利口に立ち回ろうが、すべては主の再臨で終わるのだ、という怨念にも似た叫びである。昭和6年11月の「リバイバル大会講演」(昭6.11.5)では、「世間ではこの世界はこれからどうなるであらうかと心配して居るが、聖書の示を受けて居る信者はこんな事でちつとも心配しやしない。キリストが来り給ふ時には万事の片が附くと信じて居る」と述べている。

さらに後の昭和7年6月の「他教会との提携」(昭7.6.23)では、「信仰の異ふて居る者とは救霊の聖業を共にする訳には行かない。(中略) 歓迎せらるゝよりも、今のやうに毛虫のやうに嫌がられて居る時代が、我等にとりて励ともなり刺激ともなりて大なる得である」という。すでに自分たちが「毛虫のやうに嫌がられて居る」と認めざるをえない状況が現出していた。このような追い詰められた感覚は、中田ひとりのものではなかった。教会の過激な方針について行けず離脱していく人たちが出る一方で、残った人たちの再臨への期待はますます強固なものになっていく。

ある沖縄の女性信徒は次のやうに語っている。「『ホーリネスの信者は酒を飲んであんなに騒ぐのだ』と云ふ人もあれば『狂人となつたのだ』と云ふ人もあります(中略) 或姉妹は信仰の為に家の外に突出されました。或姉妹は手と足を縛られました。(中略) 或人は『あの婦人伝道者が居るから家の娘がこんな事になる、あの婦人伝道者を殺してやる』と云つて居ます。ハレルヤ、感謝します。愈々殉教の時が参りました」(矢野しげ子「首里のリバイバル」昭6.1.1)。また、熊本ホーリネス教会の近況報告には、次のやうなエピソードが紹介されている。「或青年は衣服が悪くなつて新調しなければならぬ様になつてゐましたが他の者が古着をわけてやりましたので新調するに必要な金は全部献

金致しました。或青年は白粉をつけている天主教の信者を攻撃致しました所がホ教会の青年の髪をわけてゐる事を非難されました。私はその非難を妥当だと思ひました。又青年達も髪をわけることは主の榮を表はさないし刈つてしまへばお互ひに刈る事が出来て経済でもあると云ふので皆断髪致しました」(吉川稔昭「再臨準備会堂建設」昭6.4.2)。ここには、あらゆる世俗の虚飾を絶って、ひたすら再臨に備えようとする青年たちの姿がある。

2.10 伸び悩む教勢

激しい再臨待望の熱気が内閉的な自己陶醉へと突き進むなかで、これまで教会を支えてきた幹部のなかからも離脱者が出てくる。特筆されるのは、『リバイバル聖歌』の編集者としても知られていた中田羽後(1896-1974)の離脱である。先に触れたように、彼は父の後妻あやめとの葛藤から教会を離れた。おそらく教祖の人物の一族にしばしば起こる、骨肉の争いのひとつであろう。「脱会」というより「勘当」に近いものであったようだ。当時の機関紙でも戦後のホーリネス教会史などでも詳細はまったく語られないが、羽後の離脱という事態が一般信徒たちに与えた衝撃は、小さくなかったと推察される。

さらに昭和7年3月には、金森通倫の脱会が報じられる。2年前のリバイバル勃発時には、みずから積極的な役割を演じ、中田重治も「先生は如何に壮健なりと雖ども七十余歳の老人である。されば各地の聖徒等は主の愛によりて先生を迎へ、先生に余分の重荷をかけぬやうにして頂きたい。これ如何にもして先生に主の御再臨の時まで生きて居ていたゞきたいからである。実際其日はここ数年のところである」(「金森先生の帰朝」昭5.8.28)と気遣いを示し、持ち上げていた。昭和6年に入っても、「先生が独特の論理によりて再臨信仰の合理化を叫ばれ、全部八百の列席を陶醉せしめ」(竹田孝昭「神戸大会報」6.3.12)などあるように、地方教会をまわって信徒を激励する働きに従事していた。だが、その彼も、中田が独自の路線を走りはじめるとき、付き従う意欲を失っていくのである。

ホーリネス関係の教会史などでは、2度のリバイバルによって信徒数は飛躍的に増えた、といった解説が多い。たしかに「大正のリバイバル」はそうであった。だが、これは「昭和のリバイバル」にも当てはまるのだろうか。当時の会員数に関しては資料によって異同があり、正確な把握はむずかしい。山森鉄直の『日本の教会成長』には、ホーリネスの会員数として、昭和3年が7,878、4年が9,812、5年が12,046、6年が11,330、7年が19,523とある¹⁴⁾。これによれば5年のリバイバルはこの年の増加率を若干高め、翌6年にはむしろ多少の減少となるものの、7年には倍増ともいべき飛躍的な成長をとげた、と結論づけたいくなる。山森の数字は主として基督教年鑑などを出拠としているようだが、とくに昭和7年の突出した数字には問題がある。

まずリバイバルの年、昭和5年について検討してみよう。昭和6年3月19日付けの『きよめの友』には「再びホ教会の統計」という記事があり、前年の教会成長に関する数値が紹介されている。それによると、昭和5年の受洗者数は4,085人であったという。会員数については、昭和4年が10,114人だったのが、5年は11,463人に増えたという。4,000人もの受洗者がいるのにわずか1,000人の増加はおかしいと思うかもしれないが、「これは我教会が会員を甲乙の二種に分け現在教会に出席して常に献金して居る人を正会員として其を計上する事になつた」ためであるとしている。ここで乙会員(正会員)とは、いわゆる陪餐会員である。山森があげている昭和5年の12,046という数字が、名目的な甲会員にあたるものであろうか。しかし、単純にその年の受洗者を足せば、14,000人を越えるはずである。そして従来もホーリネス教会の会員数とは、陪餐会員に近い堅い信徒を数えていた。たとえば前年の昭和4年についていえば、教会が発表した10,114が甲会員だとすれば、宗教年鑑等に記された9,812が乙会員数であろう。ここで数え方を変えたという説明は、予想外の結果を言いつくろう便法のようにも思われる。4,000人もの受洗者を出しながら、歩留まりが四分の一程度という状態は、リバイバルとよばれてきた多くの現象に共通する特徴ともいえる。熱狂的な集会に感動して洗礼を受けた人たちはたしかに多かったが、すぐに抜けて行った人たちもまた、多かったのである。

昭和6年の伸び悩みは、どの資料からも明らかである。年末の記事でも「心霊上深められたが、其割合に数字に表はれなかつたのは残念であつた」という事実が認められ、「今年受洗者は3,000名くらひ」とされている(昭6.12.31「年末のホ教会」中田)。11,330という数字は、乙会員(陪餐会員)としては妥当なところであろう。

問題は昭和7年である。教会側の発表では、この年の受洗者は2,882人とされ、前年よりもさらに減少している。会員数は甲会員が19,523、乙会員が11,078とされている¹⁵⁾。山森がこの年の会員数としてあげたのは、この甲会員の方であった。要するに、陪餐会員を並べていけば、昭和4年が9,812、5年が11,466、6年が11,330、7年が11,078となり、5月にリバイバルが起こった昭和5年は1,600人ほどの増加があったとしても、それ以後は横ばいか、むしろ若干の減少をみせている、ということができるのである。もしリバイバルの定義に「信徒数が飛躍的に増える」という条件が不可欠だといのであれば、ホーリネス教会の昭和のリバイバルとは「リバイバル」ですらなかった、ということにもなる。

2.11 国策追隨とイスラエル主義

昭和6年(1931)9月、柳条湖事件から日本は中国とのいわゆる十五年戦争に突入する。昭和7年になると、3月には満洲国の建国が宣言された。中田重治はさっそく、この年の正月に「満蒙へ進出せよ」(昭7.1.14)、6月には「満蒙伝道の急務」(昭7.6.2)

を書いて、信徒たちに積極的な大陸への移住と伝道をよびかけている。「政治に関与せず」という建前の裏で、本人の意図とは別に、国策追従の動きが着々と展開されていった。

のちに大きな批判を受けることになる「イスラエル主義」に彼が深く傾斜していったのも、この年であった。これは広い意味でのユダヤ選民思想を背景とするが、中田の場合、同時に日本人もまた東の選民であるとする国粹的な思想とも合体していた。この「ユダヤ人・日本人＝選民」思想の強調が、昭和8年10月から表面化したホーリネス教会の分裂事件の主要因となったことは、周知の通りである。

ホーリネス教会におけるイスラエル主義の強調は、この時期に突然始まったものではない。すでに大正時代から主張されており、とくに大正のリバイバルが起きた大正8年の末には、「イスラエル（ユダヤ人）のための祈禱」ということが説かれ、『聖潔之友』の12月4日号は「イスラエル号」と銘打たれていた。その意味では、大正のリバイバルもまた、すでにイスラエル主義の高まりと連動していたといえる。大正12年（1923）ころには、全欧のユダヤ人伝道に協力するというので、ロンドンを中心にユダヤ人伝道に献身していたニューマルクという夫人に毎月の献金が送金されていたという¹⁶⁾。ただ、昭和期に入ってから中田重治が力説するようになったイスラエル主義は、一方で時代を背景にした日本人選民思想、他方で一刻の猶予もない再臨の切願と結びつくことによって、時にヒステリックな叫びとも受け取れるような激しい切迫感を特徴としていた。ユダヤ人の動向が再臨の近い証拠だと述べるとともに、日本は黙示録7:2に出る「日出国の天使」であるという主張が繰り返される（「人工的平和」昭6.11.5）。

「日本聖徒の使命」（昭7.6.9）という論考では、日本が2500年間も皇統連綿とつづいたのは、「深い神の大御心」があつてのことだと述べ、さらに東という語はヘブル語ではミズラホというので、瑞穂の国というのは聖書にある日出る国である、などという説まで披露している。そして、「イスラエル人といへば現代のユダヤ人であるが、日本民族は此民族とも関係があることは聖書に基きて大に学ぶべき事で、しかせば日本民族の世界的使命がいよいよ大なるものとなるのである」と主張している。

中田は昭和7年の11月23日から27日にかけて、淀橋聖会で「聖書より見たる日本」という講演を行なった。これは早くもこの年の大晦日に単行本として出版された。翌8年の2月20日から26日には神田ホーリネス教会で「民族への警告」という講演を行ない、これもただちに出版されたが、不穏当な表現があるとして当局から発禁処分となった。結局、改訂版として同年7月に出版されている¹⁷⁾。その一方で、8年4月には、中田夫妻は天皇から観桜会に招待され、参加している。時代の子として、中田もまた素朴な天皇敬愛者であった。

大陸での日本の軍事的侵攻が拡大の兆しをみせはじめる時代状況のなかで、老人特有の頑固さも手伝ってか、中田の「イスラエル＝日本主義」はさらにラディカルなものに

なっていく。「日本人の武力と勇気がユダヤ人の金力と智力に相合致し、立上がるなれば、たゞに亜細亜全体の幸福のみならず全世界の幸福となる事と信ずる。(中略) 生優しい基督教でなく、生氣澁刺たる生の教で、主の為に仇討をするといふ物凄いとことのもので、旧約聖書を保持するユダヤ人と君父の仇は俱に天を戴かずといふ日本人のみが味ひ得る教である」(「亜細亜の教会」昭8.8.3) といった文章などは、もはや歯止めのきかない妄念の暴走といわざるをえない。

2.12 再臨観の混乱

リバイバルの直接的なきっかけをつくったのが、聖書学院の修養生たちであったことはすでに確認したが、こうした若い修養生たちにとっては、再臨への期待も、それが来ないことへの焦りも、過激な方向へと流れやすい。当時の聖書学院生たちの心境を回顧した小池章三の「リバイバルのさなかに―男子ホーム脱線のきざし」¹⁸⁾によれば、昭和7年6月ころ、聖書学院では、「主の再臨を求める者は、冬物衣類を捧げて祈るべきだ」「藁屑は焼くべきだ」などと言って、衣類、書籍も焼いたという。こうした過激な行動の背後には、やはり監督夫人(中田あやめ)の大きな影響力があったようだ。修養生たちが本まで焼いてしまった話を聞いた彼女は、「パパの『全き愛』は焼くことはなかった。米田先生の新約講解は焼いてもよかった」などと言ったという。つまり、中田重治の本は焼くべきではなかったが、すでにイスラエル問題などで中田と意見の食い違いが見え始めていた米田豊の著書なら焼いてもかまわない、というのである。

昭和8年に入ると、中田の発言のなかに、米英にたいする批判的な言説が聞かれるようになる。「米国の財界は驚くべく震はれて暗黒になつたではないか。我等は決して他国の不幸を喜ばない。我等はこれは決して日本を邪魔した罰だとはいはない。これで日本は東洋の大掃除をする余裕が出来たと思はれる。弗が通れば道理引込む。実際米金は金があるに任せて少し威張り過ぎた。此次は英国か。余り増長すると各植民地は全く独立するかも知れない。あの黒人だとして何時までも馬鹿にされては居ない。嗚呼嫌だ。考へるだも嫌だ。主よ早く臨り給へ」(「震災の教訓」昭8.3.16)。論理性を欠いた投げやりな文章に、再臨が来ないことへの苛立ちが読みとれる。

8月の「差当り解決すべき事」(昭8.8.10)では、再臨は夢想でも理想でもなく、もう間もなく起こる現実なのだとして、これに備える信徒の心構えを、具体的な条項として並べている。そのなかには、次のような文言がみられる。「据置貯金や何年後にはとれるといふやうな保険などに金をかけて居られるだらふか。／兒女などの教育に金を費やし幾年後には何々学校を卒業して独立し得るやうになるといふ事を宛にして居れるものだらふか。／一体大切なる金を費して悪化して滅亡に行くやうな学校に愛する兒女をやつて居れるものだらふか。／遠からざるうちに栄光の体に変るといふ信仰と望を有して居る者が、結婚問題に憂身をやつして居られやうか」。間近に迫った再臨を信ずる者に

としては、貯金・保険・学校教育・結婚などは、すべて意味のない無駄な行為だ、というのである。

中田自身の思想が迷走するなかで、待ちくたびれた信徒たちの再臨観にも混乱が生じてくる。この同じ夏、信徒たちの一部に、「すでに携挙は起こった」「すでに主は再臨した」という信仰が広まる。いっこうに訪れない再臨にしびれをきらした人々の、フライングともいえよう。中田をはじめ教会幹部たちは、こうした噂は悪魔の仕業であり、本当の再臨信仰ではないとして、必死で押さえにかかる。その結果、噂自体の拡大は阻止されたが、こうした混乱が起こること自体、すでにリバイバルが決定的な行き詰まりに陥り、教会組織そのものが凝集力を弱めてきた証拠であろう。じっさい、この年の秋、中田夫妻と聖書学院の五教授たち（車田、小原、米田、一宮、土屋）との対立が表面化し、教会は二分裂の抗争に明け暮れることになる。この経緯については教団史などにも詳しいし、本稿の主題からも外れるので触れることはしないが、やがて抗争は教派を二つにわけることで決着する。しかし、両者が受けた痛手は、あまりにも大きかった。彼らにとっては、待ち望んだ再臨の日はついに訪れることのないまま、昭和17年（1942）にはじまる国家による弾圧という、暗黒の受難時代を迎えることになるのである。

ところで、この分裂騒動が起こる1年以上も前の昭和7年6月、米田豊は「思想上の脱線を防げ」（昭7.6.9）という論説を書いて、次のように警告していた。「御言を前後の関係なく一句持つて来て、自分に都合のよいやうに解釈したり、聖書の他の処に表はれて居る通念に矛盾するやうな解釈を施して、無暗に教へられたの、霊の示だのといつてはならぬ」「自分は聖霊に満たされて居るから自分のいふ事は間違ない、踊上らうが逆立せやうが其は聖霊がさせ給ふ事だから、自分は間違つて居らぬ、といふやうな事を主張すべきものでもない」。この論が掲載された同じ号には、はからずも先にあげた中田の「日本聖徒の使命」が発表されていた。米田の警告は一般信徒に向けられたものであるが、読みようによっては、独善へとひた走る監督中田（とその妻）への牽制とも受け取れる。リバイバルの行き先が、出口の見えない隘路に迷いこむなかで、米田に代表される教会幹部たちと、監督夫妻との距離は、すでにこの時点で致命的ものになり始めていたことがわかる。

結 び

以上、ホーリネス教会に起こった大正と昭和のリバイバルについて検討した。最後に、本稿で明らかにした具体的な内容を、二つのリバイバルに共通するパターンと、二つのリバイバルの相違点、という角度からまとめておこう。

まず、両者の共通点と考えられる特徴を、五つの項目として列挙してみる。

第1は、どちらのリバイバルも、ある程度まで熟達した指導者による教化・誘導・暗示・祈りなどによって、時間をかけて準備されていた、という点である。

第2は、監督として君臨した中田重治の強い主導性にもかかわらず、彼の不在時に、周囲の人物によって最初の火が起こされた、という点である。大正期の場合は、教会直属ではない、やや年配の伝道者たち、昭和期では、聖書学院の若い修養生たちだった。どちらもリバイバルへの強烈な願いが原動力になっていた。

第3は、リバイバルは火にたとえられ、その火の延焼への努力が、教会をあげて取り組まれたことである。それはいずれも東京の諸教会から地方に飛び火するというかたちで拡大した。ここでは機関紙による宣伝や、中央から派遣された教師たちの指導が、積極的な役割を演じた。

第4は、どちらのリバイバルも、約4～5ヶ月後に企画された大規模な聖会でひとつの頂点に達した、という点である。それは建前として超教派を標榜するものであったが、実質的には「聖潔派」「純福音」の自覚をもつ一部のサークルにとどまり、日本のキリスト教界を広く巻き込むような運動にはならなかった。

第5は、リバイバルを担った当事者たちの心情面についてであるが、そこには「末の世的世界的リバイバル」に参加しているのだという強烈な再臨思想が共有されていた、という点である。

こうした共通点にたいして、二つのリバイバルの相違点というか、大正のリバイバルをひとつの先例としたとき、昭和のリバイバルが異なった様相へと移って行った分岐点は何であったのか、という点をまとめてみたい。

まず、大正のリバイバルは「期待のリバイバル」という呼称で、その特徴を示すことができる。それはやがて起こるであろう再臨への強い「期待」に支えられ、リバイバル的集会の恒常化によって教会成長をうながす原動力となりえた。すでに指摘したように、そもそものきっかけを作ったのは、教会外の独立系伝道者であり、彼らは強い信仰や情熱に加えて、アメリカでのリバイバルを若いころに経験するなど、ベテランの知恵と技能をそなえていた。多くの教会員にとって、そこに沸き起こった熱狂的雰囲気は新鮮なものとして受けとめられ、それがさらに最後の本格的リバイバルへの期待を高めるといふ、相乗効果を果たした。他教派や世間一般からの反応は冷ややかだったが、それもまた、この教会が孤高の道を歩む自覚と自信のエネルギー源となりえたのである。

これにたいして、昭和のリバイバルは「窮地のリバイバル」として特徴づけることができる。このリバイバルは、すでに始まりの時点がエネルギーのピーク時だった。直接の火をつけたのは、監督夫人の感化を受けた若い修養生たちだった。待ち望んだリバイバルの始まりは、大きな感動と興奮をもって迎えられたが、それは主の再臨という出来事によってしか完結しえないというディレンマをかかえていた。リバイバルが続行されるなかで、苦しみをともなう徹底した自我の否定が強調されるようになる。「うめき」

「認罪」といった言葉が日常語となり、「證詞の一斉射撃」が集会のメインになっていく。さらに、悪化する社会状況、教会外に拡大しない火、来ない再臨への焦りのなかで、高まる内部矛盾の葛藤のエネルギーは、自己分裂の道を突き進む結果を招いていったのである。

このようにまとめたからといって、ここで大正のリバイバルを「良いリバイバル」、昭和のリバイバルを「悪いリバイバル」といったような、単純な二項対立のなかに押し込めようといった意図は、筆者にはない。そもそもホーリネス・リバイバルに代表されるようなキリスト教的信仰ラディカルズムと、国家主義的イデオロギーあるいは広く近代の文明化との関係を、単純な定式に帰着させることはできない。ましてや、そこに一元的な評価を下すことなど不可能である。

とくに日本の社会のようにキリスト教徒が少数派に甘んじている近代国家において、そのなかでもファンダメンタルな超越志向にこだわりつづけた人々の群れが、一方で狂信的な体験主義、妥協なき孤立主義、無反省な時代状況への埋没の道を辿らざるをえなかったことは事実である。昭和17年以降の国家による「ホーリネスの弾圧」とよばれる出来事も、意志的な抵抗の結果というより、当人たちにとっては「予期せぬ災難」といった性格が強かったのである。

しかし、他方において、あらゆる世俗の権威や権力を超越した価値を志向する宗教的ラディカルズムが、「リバイバル」という特異な状況を通して、近代日本には稀な精神性をそなえた人々を生み出したことは、あらためて注目すべきであろう。このリバイバルの痛みをくぐり抜け、さらにその後の弾圧期を乗り切った人々のなかからは、戦後に復興した福音派の基礎を築き、そこで活躍した数多くの人材が輩出したのである。

こうした戦前期のホーリネス運動と、1980年代以降に主としてアメリカからの影響で活発化した、やや楽天的な「聖霊運動」とが、いかなる連続性をもっているかという問題は、かなり微妙なところが多い。全体としていえば、両者はむしろ切れている、といった方がよいかもしれない。近年では、いわゆる福音派と称する人々の一部に、広義の聖霊派に共鳴し、ここに歩み寄ろうといった動きもみられる。こうした聖霊派の体験主義と、堅い福音派の教義がリンクし、聖霊の業としてのリバイバルを強く待望するとき、戦前期のホーリネス教会が体験した具体的な問題から学ぶべき教訓は、少なくないと思われる。

およそ力ある信仰生活や宗教的創造性とは、整合的な机上の理論や教説からではなく、むしろ相容れない複雑な情意や理念の葛藤、深い自己矛盾の苦悩のなかから芽生えるものであろう。その意味で、戦前期のホーリネス教会に起きたとされる「リバイバル」が、そうした宗教的な意味や力の大きな源泉たりえたことだけは、否定できない重要な歴史的事実として残されている。

注

- 1) 詳しくは、池上良正「近代日本におけるキリスト教聖霊派の系譜——ホーリネス・ペンテコステ・カリスマ運動」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第33号，2001年を参照されたい。
- 2) Martin, David. *Tongues of Fire: The Explosion of Protestantism in Latin America*, Basil Blackwell, 1990.
- 3) 土肥昭夫「リヴァイヴァル」『日本キリスト教歴史大事典』教文館，1988年。
- 4) 森本あんり「リバイバル・ムーブメント」『岩波キリスト教辞典』岩波書店，2002年。
- 5) 小林廉直「大正と昭和のリバイバルを憶う」『ホーリネス・バンドの軌跡』新教出版社，1983年。
- 6) 以後、括弧による日付は、ホーリネス機関紙の発行年月日をさす。機関紙名は大正10年12月までが『聖潔之友』，11年1月以後は『きよめの友』である。
- 7) 米田勇『中田重治伝』中田重治伝刊行会，1959年，253-256頁。
- 8) 同書，274-275頁。
- 9) 『ホーリネス・バンドの軌跡』（前掲），23-25頁所収。
- 10) 森山諭「日本の教会におけるリバイバルの歴史」『ホーリネス・バンドの軌跡』（前掲），20-21頁所収。
- 11) 同書，21頁。
- 12) 同書，22頁。
- 13) 岡本ふみ子編『再臨とリバイバル』東洋宣教会ホーリネス教会出版部，1931年，所収。ただし，ここでは『ホーリネス・バンドの軌跡』（前掲），39-44頁に再録された現代仮名遣い表記の文章を引用した。
- 14) 山森鉄直『日本の教会成長』（有賀喜一訳）いのちのことば社，1985年，203頁。
- 15) 『中田重治伝』（前掲），456頁。
- 16) 車田秋次『御霊の法則——わが生涯の回顧』車田先生米寿記念出版委員会，1974年，61-62頁。
- 17) 『聖書より見たる日本』「民族への警告」とも，『中田重治全集』第2巻，福音宣教会，1991年，に再録されている。
- 18) 『ホーリネス・バンドの軌跡』（前掲），112-113頁所収。

文 献

池上良正

2001 「近代日本におけるキリスト教聖霊派の系譜——ホーリネス・ペンテコステ・カリスマ運動」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』33。

岡本ふみ子編

1931 『再臨とリバイバル』東洋宣教会ホーリネス教会出版部。

車田秋次

1974 『御霊の法則——わが生涯の回顧』車田先生米寿記念出版委員会。

小林廉直

1983 「大正と昭和のリバイバルを憶う」『ホーリネス・バンドの軌跡』所収。

土肥昭夫

1988 「リヴァイヴァル」『日本キリスト教歴史大事典』教文館。

中田重治

1991 『中田重治全集』第2巻, 福音宣教会。

ホーリネス・バンド弾圧史刊行会編

1983 『ホーリネス・バンドの軌跡——リバイバルとキリスト教弾圧』新教出版社。

森本あんり

2002 「リバイバル・ムーブメント」『岩波キリスト教辞典』岩波書店。

森山諭

1983 「日本の教会におけるリバイバルの歴史」『ホーリネス・バンドの軌跡』所収

山森鉄直

1985 『日本の教会成長』(有賀喜一訳) いのちのことば社。

米田勇

1959 『中田重治伝』中田重治伝刊行会。

Martin, David.

1990 *Tongues of Fire: The Explosion of Protestantism in Latin America*, Basil Blackwell.